慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オスマン=アラブ主義者のディレンマ : <<盟約協会>>一九一三-一九一八年
Sub Title	The Ottoman-Arabist's dilemma and the covenant society, 1913-1918
Author	田口, 晶(Taguchi, Akira)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.71, No.1 (2001. 12) ,p.47- 86
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20011200-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オスマン＝アラブ主義者のディレンマ
――《盟約協会》一九一三―一九一八年――

田口　晶

一　序説

初期アラブ・ナショナリズム、とりわけ「青年トルコ」時代（一九〇八―一八年）に焦点を合わせた研究の課題はオスマン主義とアラブ・ナショナリズムの関係を描くことだ、といってよいだろう。というのも、オスマン主義が民族・宗教を超えたある一定の「普遍」を目指すのに対し、逆に「特殊」を強調するのがオスマン帝国におけるアラブ・ナショナリズムなのだから。だが、現実のオスマン主義が帝国の一体性維持の名のもとにトルコ・ナショナリズム（さらに一歩進んでトゥラン主義）という「特殊」の側面を内に孕んでいたのもまた紛れもない事実である。それが帝国の「トルコ化」として表れる以上、アラブ・ナショナリズムはこの拡大解釈された「特殊」オスマン主義と対峙せざるを得ない。[1] 二種類のオスマン主義をまず厳密に区別したうえで、だとすれば帝国の「枠組」そのものはアラブ・ナショナリズムにとって全く相容れない存在であったのか。これに対する懐疑が一九六〇年代以降登場した修正論的研究の主眼であったように思われる。[2] それはアントニウスの『アラブの目覚め』に代表されるようなオスマン帝国の解体を必然視する通説的理解への挑戦であった。[3]

オスマン帝国という国家の枠組に制約された――それはともすれば政治的に未成熟であるとの評価をともなう――青年トルコ時代のアラブ・ナショナリズムが、修正論的観点からアラブ主義（Arabism）という特別な名で呼ばれるようになってすでに久しい。[4] 言わば切り下げられたこの呼称には、裏返しの民族主義史観や一種の進化

主義的な段階化認識が窺える。[5] しかし、ほぼ修正論者の共通理解となった感のあるこの二項的な理念型も、アラブによる政治的運動の多様性を説明しきれるものではない。とりわけ研究対象を個人レヴェルにまで掘り下げてみた場合、意外と適用困難な場合が多いのである。オスマン帝国のアラブの多くが帝国の存在をとりあえず自明のものとしたうえで統治者側＝公権力への抵抗を実践したのであれば、まずは従来の固定化された観念の圏外に出て新たな分析基準を提起しなくてはなるまい。前世紀初頭のアラブ知識人がどのように現実世界を把握し、そこからいかなる政治的実践が生まれたかが問われるべきではなかろうか。

本稿は、上記の観点から敢えて「オスマン＝アラブ主義」という新たな分析視角のもとにアラブ政治運動を描き出すことを課題とする。[6] オスマン政府への「構え」を基準としたうえで、「体制派」オスマン主義や独立志向の「真性」アラブ・ナショナリズムとは区別された第三のカテゴリーとしてオスマン＝アラブ主義を位置づけたい。ここで暫定的に定義しておけば、オスマン＝アラブ主義とは、自らをアラブ人であると政治的に意識しつつ、それと同時にオスマン国民であるとも見なしているという意味で「普遍」と「特殊」を内に孕んだ複合的アイデンティティを標榜するものと考えることができる。こうしたアプローチは、アラブ「国民」形成の過程を辿るというよりも、むしろアラブがオスマン主義をいかに読み換えてきたかにわれわれを注目させることになるだろう。これによって運動の実相をとらえ、より緻密な検討を行なうための足がかりとしたい。本稿ではそのケース・スタディとして、一九一三年イスタンブルでオスマン軍人を中心に生まれた《盟約協会》Jam'iya al-'Ahd［以下、《協会》と適宜略］を取り上げるが、その際、結社創設者であるアジーズ・アリー・アル＝ミスリー 'Azīz 'Alī al-Miṣrī（一八七九―一九六五年）の思想と行動を中心としつつ、他のメンバーとの比較にも目を配る。[7] 軍人の思想は忠誠の問題と切り離せないがゆえに、彼らを俎上に載せることは、本稿が対象とする第一次世界大戦直前からオスマン帝国解体へと至る政治的変動期において特に意味をもつ。[8] これは、《協会》と他のアラブ知識人のスタンス――オスマン＝アラブ主義の意味づけ、政治的行動形態、特に統治者側との関係――の差異、つまりオスマン＝アラブ主義に内在する異なる位相をも暗示している。

研究史では、先駆的なアントニウスからエリーゼル・タウバーの三部作に至るまで、《協会》を民族主義結社として評価することでは――肯定的にしろ修正論にしろ――一貫してきた。[9] いずれにせよ結社の実像を伝えているとは言いがたく、ここでもオスマン＝アラブ主義の視角に立った再検討が求められているといえるだろう。

二　オスマン＝アラブ主義の誕生とアラブ会議

《盟約協会》が結成された経緯とはいかなるものであったのか。まず、その前提を探っておこう。

オスマン帝国とアラブの関係は一九〇八年の「青年トルコ」革命によって転機を迎える。アブデュルハミト二世による専制を批判し、立憲政の回復を求めるという点において、「青年トルコ」運動は帝国の諸民族を包含する性格を有していた。[10] つまり、運動の理念そのものはオスマン国民としての普遍性に立脚した「普遍」オスマン主義に基づくものだったといってよい。だが、前世紀以降の言語・文化的「復興」（nahḍa）によってゲルナーの言う耐エントロピー性を獲得したアラブにとって、民族的アイデンティティを無視したいかなる変革も許容できるものではなかった。すなわちオスマン＝アラブ主義の誕生である。やがて革命は成功したが、第二次立憲政の中心勢力となっていく《統一と進歩委員会》［以下、《統一派》と略］による「トルコ化」政策は彼らを失望させた。オスマン帝国を護持することにかけてはアブデュルハミトと《統一派》は軌を一にしており、しかも皮肉なことに、後者の担い手こそは前者による「近代化」政策の所産といえる。「近代化」は中央集権と結びつく傾向をもつが、それは帝国の場合「トルコ化」と裏腹な関係にあった。オスマン＝アラブ主義の運動は、こうした「特殊」オスマン主義に対抗するために、本来的「普遍」オスマン主義を分権論として読み換えていくことだったといえる。それが民族自決運動の立場から見て微温的なものにとどまった理由には、「青年トルコ」運動における改良主義志向の経験を見逃せない。以下に問題を整理してみる。

①運動の「アイデンティティ・ポリティクス」的要素。タンジマート以来のオスマン帝国の「近代化」政策は国家の管理職養成のための官立専門教育機関の発達をもたらし、アラブの言わば「教養市民層」を生みだした。[11] 帝国の「トルコ化」によって、彼らはアラブとしての集合

的アイデンティティの強調に引き寄せられる。しかし、それはオスマン国家というアリーナ内部での権利獲得闘争に帰結する可能性を同時に孕んでいた。

②帝国主義体制における立場。オスマン帝国の「近代化」政策は、一方でヨーロッパ列強の干渉に対する抵抗の側面をも有する。ロシアや西欧諸国の圧迫に屈しつつあるムスリムにとって、帝国が「希望の星」に見えたのとしても何ら不思議ではない。アラブにとってオスマン帝国の存在は列強の侵略への牽制としての意味を持つ。

③アラブの「地域主義」の問題。オスマン帝国内のアラブ地域は大きく「歴史的」シリア、イラク、アラビア半島、リビア（一九一二年まで）に分けることができるが、各地の社会構造はそれぞれ異なるために住民のオスマン政府に対するスタンスも当然違ってくる。さらに、帝国外に広がるアラブ地域、特に帝国が名目的な宗主権を有しながら実際にはイギリス支配下にあるエジプトの存在は、少なからぬ影響を運動にもたらすだろう。

この相互に関連しあう三つの問題は一九一三年六月にパリで開催された第一回アラブ会議にどう表れたであろうか。検討に入る前に会議の概略を示してみる。

まず出席者について言えば、多くがシリア出身者によって占められたことがわかる。しかし、彼らは《ベイルート改革協会》Jam'iya Bayrūt al-Iṣlāḥiya[12]からの代表を別にすれば、カイロの《オスマン地方分権党》Ḥizb al-Lāmarkazīya al-Idārīya al-'Uthmānī[13]やパリの《青年アラブ協会》al-Jam'iya al-'Arabīya al-Fatāt[14]のメンバーに見られるように、オスマン帝国外在住者であった。《オスマン地方分権党》のザフラーウィー 'Abd al-Ḥamīd al-Zahrāwī（一八七一―一九一六年）[15]が主宰した会議の焦点は、オスマン帝国におけるアラブ人の権利、分権論にもとづく改革の必要性の主張とシリアからの移民問題に絞られ、帝国からの分離や離脱は議題とならなかった。[16]彼らの決議はとりあえず受け入れられて、《統一派》の代表との間に一三項目にわたる合意がなされた。その要点は次のようなものである。州政府とあらゆるレヴェルの学校における公用語・教授語としてのアラビア語の採用。州行政での外国人専門家の招聘。召集兵の州外軍務の禁止。州総督、県知事（mutasarrifīna）、上院議員の任命に関する差別撤廃措置など。[17]

合意項目が端的に示すように、アラブ会議はオスマン＝アラブ主義のひとつの形を示してみせた。確かに、オスマン政府が多民族を包摂する帝国の「枠組」とトルコ

主義という二兎を追うこと――それは統治者側の願望の多さを意味するが――による一義的なオスマン主義からの逸脱は、被統治者側による能動的なオスマン主義の解釈を可能とさせる。だが、果たして会議の構えは有効な戦術たりえたのか。というより、政権側に危機感を抱かせるほどのものであったのか。まず①の問題が検討の対象となる。

もちろん会議ではアラブの集合的アイデンティティが排他的に主張されてはいない。決議文からは、帝国におけるナショナル・マイノリティとして同じ境遇にあるアルメニア人との連帯の表明すら見出せる。けれども、会議のスタンスがアラブという「特殊」を掲げることで、実は《統一派》率いるオスマン政府のイデオロギー――トルコという「特殊」――のちょうど鏡像関係を成していた側面は否定できない。現実のオスマン国家が純粋な見かけの社会――誰も「普遍」オスマン主義を信じないことによって機能する――であったとすれば、ザフラーウィーらの要求は統治者側にとってむしろ与し易いものだった。こうした会議の「アイデンティティ・ポリティクス」は、シャキーブ・アルスラーン Shakīb Arslān――帝国崩壊後におけるアラブ・ナショナリズムの代表的なイデオローグのひとり――をはじめ、言わば「勝ち組」に属する「体制派」オスマン主義者の不信を買うことになる。[18] 結局、会議の成果は根本的な改革ではない、ザフラーウィーの上院議員任命に象徴される単なる懐柔策に還元されてしまうだろう。

むろん、革命ではなく改良を目指すのがオスマン＝アラブ主義であるのなら、ザフラーウィーらの統治者側への関与は、原理的見地からの批判はさておき、リアル・ポリティクスとして唯一残された道であったことは理解できる。「われわれはまずオスマン的結合を、さらにアラブ的結合を、そしてより重要なシリア的結合を有している」。[19] 彼の言葉は会議の精神を端的に要約している。だが、こうした個別的アイデンティティ（シリア→アラブ）とオスマン国家の一員という普遍的アイデンティティの間に生まれる緊張関係の克服という問題に関して、ムスリムとキリスト教徒の意識の共有は果たして容易だったのか。相次ぐ対外戦争での敗北によってオスマン帝国は実質的にムスリムの国家となりつつあったし、政府もまた「イスラーム」による一体性を強調し始めていた。アラブ地域にしても、会議が一九世紀中葉以降の宗教・宗派紛争を反映した既存の地方制度を是認するので

あれば、これは避けて通れない問題である。②の問題が示すように、オスマン帝国の存在理由がヨーロッパ帝国主義からの防壁としての機能にあるにせよ、そもそもカリフを自称するスルタンの意味づけは、シリアのキリスト教徒にとってムスリムのそれと異なるのではないか。確かに、会議では一八六〇年の宗派紛争をも引合いに出しつつ両者の協力が強調された。[20] しかし、両者のスタンスの相違は、会議直前にベイルート代表のキリスト教徒らによるフランス当局との接触――これにはシリア主義に対するレバノン主義という地域主義の問題も絡んでいた――が発覚したことで現実のものとなる。[21] 会議の議論は両者の綱引きで相殺されてしまい、むしろ穏当なものとなっていく。《統一派》もこれを離間策として活用するのに吝かではなかったように思われる。会議後にイスタンブルを訪れたサラーム Salīm ʻAlī Salām らムスリム側代表は、オスマン国家とスルタン＝カリフへの忠誠を誓う。[22] ザフラーウィーは、シリア人の分裂を嘆かざるを得なかった。[23]

問題はシリア人内部の確執にとどまらない。会議がまとまりを欠きながらもシリア出身者主導で進められる一方で、他地域との関係をどう取り結ぶのか。イラク代表の抵抗で「シリア会議」の名称は避けられたものの、「シリアとアラブ」と両者が併記された文言が決議文に繰り返し現れることから見てもシリアの特権的な位置付けは濃厚であった。では、会議は「アラブ」をどのように定義したのか。それが③の問題でもある。ウライシー ʻAbd al-Ghanī al-ʻUraysī は、アラブが集団 (jamāʻa) 的権利を主張しうるかと問いかけ、アラブはそれに必要不可欠な言語・人種・共通の歴史と慣習・政治的情念を有すると結論づけた。[24][25] こうしてアラブの民族的アイデンティティ (jinsīya) が確認された以上、次にアラブの空間概念、つまりその境界作定に注意を向ける必要がある。

しかし、会議にとって「アラブ」とは、あくまでオスマン帝国内のアラブでしかない。討議への参加を要求したあるエジプト人法学者に対してザフラーウィーは、独自の行政組織をもつエジプトは議論の対象とはなりえない、としてこれを退ける。[26] 会議のアラブ的「想像」はオスマン帝国の版図を越えることはなかった。それは帝国内のトルコ人と見事なまでに相似形をなしていたのである。

三　《盟約協会》の結成

綱領と国家構想

では、《盟約協会》は「失敗した」アラブ会議に対して如何なるオスマン＝アラブ主義を構想しえたのか。まず、両者の関わりに触れておかなければならない。一九一三年一〇月二八日の《協会》結成は、[27]会議に対する否定的態度に起因していた。

例えば、やがて《協会》創設者となるミスリーは当時リビアでイタリア軍と戦っていたが、この言わば帝国主義者の首府――パリ――での会議開催自体をまるで利敵行為とばかりに非難している。会議のタイミングがちょうど二度にわたるバルカン戦争の谷間の時期であっただけに尚更であろう。シリアを中心に各地から会議に対する支持が表明されるなか、ミスリーはそれを拒否した。[28]しかも帰国してみると、オスマン政府と会議との合意は事実上骨抜きにされている。彼は、ザフラーウィーらによる《統一派》との妥協に激怒し、これに「反対するよう若者たちを集めて煽動しようと」[29]画策すらしたのだった。

こうした態度に軍人独特の心性を見て取ることは容易であり、ミスリーが結成した《協会》がセクト的純化主義を採ることによって、メンバーの多くを軍人が占めたのも当然の成り行きであったかもしれない。[30]アラブ会議で明らかとなった、シリア人によるオスマン帝国を外国に売り渡しかねない危険な「遊戯」を阻止すること。そのためにはわれわれ軍人が国家の支柱とならねばならぬ。[31]彼は結社の名称の由来について「祖国 watan への奉仕を、メンバーと、そしてアッラーとの盟約のために」[32]と解説する。ここで特徴的なのは、彼らのいう「祖国」が他ならぬオスマン帝国を指していたことだった。結社の旗印となる「盟約」というシニフィアンは、会議に参加した諸結社のそれ――「ベイルート」「地方分権（特にシリア）」「青年アラブ」に暗示されるアイデンティティの強調――と明らかなコントラストをなしている。民族の坩堝としての軍隊は「大きな、集権的に教育され、文化的に同質な単位」（E・ゲルナー）といえるだろう。それは抑圧装置であるとともに最も機能的な国民統合の装置として、あるいは現存の国家を過去につなぐ最後の絆として結束が重視された、言わばオスマン帝国を小さくしたような社会的場だった。事実、《協会》メンバーはアラブ人だけでなく、トルコ人・アルバニア人・クル

ド人をも含めた「さまざまな民族的出自」から構成されていたのである。[33] 結社の綱領でも「六世紀にわたって西洋に対する前衛の役目を果たした」トルコ人を評価し、アラブはその「後衛」たらんことが謳われていた。[34]

しかし、それは《協会》が公の思想を祖述するだけの結社であったことを意味しない。確かに彼らの「国民」概念からは、軍が政治化する際に典型的に見られる自己と（あくまで彼らが考える）国益の一体化による過剰なまでの国家の後見人、救済者気取りを窺うことができるが、それだけに過去の記憶と現在の主体的な意志に根ざした、つまりルナンが定義した意味での「開かれた」ナショナリズムを構想する余地も生じてくる。それを詳らかにするためには綱領の分析が必須であろう。だが、この綱領そのものに潜む問題性には慎重であらねばならない。というのも、《協会》が秘密結社だったためにわれわれは関係者の証言に頼らざるを得ないのだが、諸テクストによって表現の異同が見られるうえ、オスマン帝国の解体による事後的な再構成の可能性を否定できないからである。[35] 現在われわれが知りうる綱領は果たして結社創設時の状況を反映しているのか。《協会》はトルコ＝アラブ二重帝国を構想したことで知られるが、[36] もし《協会》がアラブ人だけでなくその他のマイノリティをメンバーに含んでいたのであれば、「アラブ地域の自治（al-istiqlāl al-dākhilī）」（綱領第一項）に限定された要求は結社の実情に合致しているとはいえない。だとすれば、《協会》の「綱領」以前の綱領、つまり「真の」綱領を復元する必要がある。

これに関しては、われわれは残念なことに未だ決定的な資料を見出すことはできない。ただ、これまでミスリーの個人的な構想とされてきた「東地中海国家」（Dawla Sharq al-Baḥr al-Mutawassiṭ）構想というものがある。彼の構想は結局他のメンバーに受け容れられなかったという後年の回想が事実としても、[37]《協会》の出発点からすればむしろ「真の」綱領にふさわしい。少なくとも、結社設立からある時点までは採用されたと見るべきではなかろうか。ともかくその主要な点を抜き出してみよう。

①トルコ、アラブ、アルバニア、ブルガリアのみならず、エジプト、スーダン、リビア、チュニジアにまたがる連邦国家。

②象徴（ra'īs ramzī）としてのオスマン家のスルタン。

③教育・国防・外交を除く行政は構成国が管轄する。

④共通語としてのオスマン語とそれぞれの地域語の共存。

⑤宗教的寛容（wujūb al-tasāmuḥ al-dīnī）[38]。

ここにあるのはアラブ会議、さらには《協会》の「綱領」とはかなり異なる構想である。「東地中海国家」は会議がそうであったように既存の州の枠組に必ずしも甘んじてはいない。むしろ現存するオスマン帝国の領域すら超えた構想を示すことで現状の破壊を意図している。帝国の統治機構に関していえば、「各地域が独自の議会を、イスタンブルに連邦議会 barlamān ittiḥād を持つ合州国 wilāyāt muttaḥida」[39]として、「綱領」でモデルとされたオーストリア＝ハンガリーよりもアメリカ合州国が強く意識されているが、スルタンが名目的な存在であることを考えれば、強力な中央権力の存在しない緩やかな国家連合に近い。一方で、多元主義のもとでアメリカ人の同質性が強調されるように、ミスリーの構想も様々なアイデンティティを尊重しつつ「東地中海」人としての同質性を標榜している。共通の教育政策が求められるのはこのためかもしれない[40]。

ミスリーの「東地中海国家」構想と《協会》の「綱領」との比較では、スルタン＝カリフの問題が注目に値しよう。前者は寛容な宗教政策が強調され、カリフではなく「世俗的」権威としてのスルタンにのみ言及する。他方、「綱領」は第二項でカリフについて触れているが、「国民（al-umma）の政府と議会を有する英国の君主制に倣う」[41]という付帯条項がついていた。これは無論英国国教会の首長としての役割を併せ持つイングランド国王の存在が念頭にあるが、むしろ立憲君主制との関連で主張されたものだろう。ニュアンスに若干の相違はあるにせよ、ともにスルタン＝カリフの相対化を意図している[42]。この問題に対して踏み込んだ議論を避けたうえに、サラームらのイスタンブル訪問に象徴されるごとくスルタン＝カリフの幻影から逃れられなかったアラブ会議との差異は歴然である。

アラブ会議がアラブ――というよりシリア――の集団的権利を強調する「アイデンティティ・ポリティクス」だとすれば、「東地中海国家」構想はその多元的志向とスルタン＝カリフ問題への対応に現れているように、オスマン＝アラブ主義のもう一方の極として支配的イデオロギーをよりラディカルに読み換える「真の」オスマン主義とでも呼ぶべきある種のユートピア思想を提示して見せた。ただ、ミスリーの構想が受け容れられず、内容

的に両者の中間に位置する「綱領」に結局落ち着いたのだとすれば、それは、アラブが「多数派」に過ぎない結社からアラブそのものの結社へ、という《協会》の重大な変質を意味するだろう。

イデオロギーと実践

そこで次に《盟約協会》の主要メンバーに焦点を合わせつつ、結社内におけるスタンスの振幅をも見ていくことにしたい。

結社創設者であるミスリーの前半生は、上記の構想を描くにふさわしい脱領域的なものであった。[43]《協会》のみならず、当時のアラブ政治運動全体を通じても稀有なエジプト出身者の彼にとって、イギリスによるエジプトの軍事占領は決定的な原体験となる。それは彼に「エジプトからイギリスを追い出す」ためオスマン軍人となることを決心させた。将来を「希望の星」オスマン帝国に託したミスリーは、しかし、帝国の現実を知るに至って「青年トルコ」運動に加わることになる。[44]《統一派》のメンバーであった彼は、革命後の失望から今度はそれの批判者へと転じ、《文芸クラブ》、《カフターン協会》等の諸結社で活動していく。

一九一〇年、イエメンのイマーム・ヤフヤーが反乱を起こすと、鎮圧部隊の参謀長として従軍したミスリーは和平交渉で中心的な役割を果たした。[45]イエメンへの自治権付与という合意内容は今後のモデルとして評価され、アラブ知識人の間で彼の声望は高まる。

だが、彼がオスマン＝アラブ主義者として自己を確立する一方で、故郷であるエジプトとの距離は開いていった。ファリード Muḥammad Farīd らエジプト民族運動の指導者たちは、ミスリーの行動を帝国の分裂をむしろ加速させるものとして不信の目で見ている。[46]ミスリーは帝国の内実を理解しないそうした単純な見解には与しなかった。彼はエジプトを離れたことによる自身の変化に気付かざるを得ない。

トリポリ戦争はミスリーにとって試練となった。オスマン政府がリビアを見放すという状況下で、彼は一年半にわたりイタリア軍を苦しめる。だが、「キレナイカの英雄」は周囲の反対を押し切って帰国してしまった。[47]前述のとおり、その後の《協会》結成に至る経過からすれば、本国の危機が彼にそうさせたと言うべきだろう。しかし、一見アラブへの「背信」ともとれるこの行為に、ミスリー個人が抱えるオスマン＝アラブ主義の矛盾がある。彼の行動を律していたのは、何よりもまずオスマン

軍人としてのそれであった。これは、父がカフカスからの亡命者でチェルケス人だったというミスリーの出自とも絡んでくる。ある意味で彼もまたオスマン帝国への亡命者だった。エジプトを離れることで初めて「アラブ人」となったのである。[48] だが、デラシネの彼は、アラブの一体性についても醒めた認識を抱くことになるだろう。進歩的なイラク人、教養はあるが現実性に欠けるシリア人…。トリポリタニア、イエメン、ヒジャーズと続き最下位はあろうことか故郷のエジプトである。彼はエジプト人の「抜け目なく堕落しきった性格に怖気を振るっていた」。[49]

ミスリーにとって、アラブとは「フィクション」だったのかもしれない。だからこそ多元的なオスマン帝国という「神話」を必要としていたのである。「フィクション」とは言っても、それは自らのアラブとしての虚構性をアイロニカルに自覚していた、という意味においてである。彼がアラブ会議による「アイデンティティ・ポリティクス」を軽蔑していたのはそのためであろう。だが、彼は自身の矛盾に関しては目を瞑っていたといえる。ユートピアの夢想はどんなものであれ、まずはそれを夢想した人間が自分のために望んだものとなってしまうのは避けられない。口には出さないが、彼は他人も同じことを望んでいるのだと決めてかかっていた。葬り去られた「東地中海国家」はひとりの亡命者が自分の居場所を求めて思い描いた構想なのである。

一方、《盟約協会》のオスマン帝国内出身者は如何なる態度を示したのだろうか。

彼らの意識が帝国の外からやって来たミスリーのそれとやや異なるものであろうことは容易に想像できるが、纏めてみるとこうなる。

（i）《協会》にはイラク、シリア出身者がおり、特に前者が多数派だった。[50] ハーシミーやサイードを始めとするイラク出身者の軍人志望の動機として「立身出世」願望を指摘できる。[51]「イスタンブルは大志あるイラク人のメッカであった」[52] とあるイラク人がいみじくも述べたように、士官学校は中下層階級にもエリートへのバイパスとして開かれていた。《協会》のモットー「意思あるところに道あり（Laysa lil-insān illā mā sa'ā）」[53] はまさに彼らの願望を示したものといえる。軍の「トルコ化」はそれを阻害しかねない。[54]

（ii）《協会》のメンバーの多くは軍人であり、オスマン国家護持の尖兵としての自負を持つ。と同時に、アラ

ブとしてのアイデンティティをも併せ持つ彼らは、弱体化した帝国の瓦解に備えた「準備工作」にも手を染めていく。オスマン＝アラブ主義者の帝国に対する態度はアンビヴァレントなものとならざるを得ない。一九一二年バルカン戦争時のイラク出身軍人六〇名による「蜂起」未遂事件[55]、アラビア半島の諸勢力との接触[56]はこうした文脈で捉えられる。

（三）《協会》がイスタンブルで結成されたことに表れているように、彼らは社会的出自や「教育的巡礼」によって地域的利害からある程度切り離され、帝国の一体性を刷り込まれていた。ある《協会》幹部による「行政的巡礼」――イスタンブル→ベイルート→ダマスクス→モースル→バグダード→バスラ――がもたらした地方支部設置の経緯は、彼らの空間認識があくまでオスマン帝国を前提にしていたことを示すものだろう[57]。

結局、オスマン帝国内――とりわけイラク――出身者は《協会》に何を託そうとしていたのか。サイードはのちに「アラブの反乱」を回想した際にこう述べている。「われわれの中に、オスマン帝国からの離脱を考える者はひとりもなかった。われわれの考えは、共通の国家機構においてトルコ人と協力するという条件で、アラブ地域の行政機関と公用語としてのアラビア語を獲得することにあった[58]」。これは現在われわれが知りうる結社の「綱領」の端的な要約といえる。それどころか、地域的利害への関心が希薄なことを除けばアラブ会議との思想的な差異は必ずしも明確ではなく、むしろアラブ・ナショナリズムへの直線上に位置づけられるような性格をもっている。だが、彼らが会議の妥協的なスタンスに憤慨し、少なくともその初期の段階においてミスリーの「東地中海国家」構想に一定の理解を示したことは間違いないだろう。でなければ、多民族からなる《協会》そのものの成立がありえなかったはずである。にもかかわらずここに露呈しているミスリーとサイードの事後の「語り」のずれは、それぞれが《協会》に抱いたイメージとやがて結社を分裂に導く「アラブの反乱」への対応の相違が反映されたものであるとは言えないだろうか。

四　《盟約協会》と青年トルコ人

アラブ会議をめぐってミスリーと対立したザフラーウィーはこう述べている。彼ら軍人たちは政治的経験が欠如しており、政治に関わるべきではない。彼らのやり方ときたら全く稚拙で退屈してしまう、と[59]。ハマ選出の

代議士であり、野党《自由と連合党》の創立メンバーだったザフラーウィーにすれば、[60]《盟約協会》の目指す方向は現実性を欠く絵空事でしかなかった。あるいは、青年将校たちが思い描く性急な「解放のドグマ」に対する警戒の念もあったかもしれない。

だが、会議が統治者側にとって脅威となりえずザフラーウィー自身の上院議員就任をはじめとする若干のポスト配分による取り込みのすえに無力化されたのは、現存の社会構造内部において「承認」をもとめる政治スタイルが、彼らに受動的な態度をもたらし、その自律性を奪ってしまったことにもよるのではないか。[61]他方、《協会》の構えは――結社内部のずれがあったにせよ――現存秩序の破壊を目指す「真の」オスマン主義を標榜するものだった。かつて統治者側が提唱した「普遍」オスマン主義――宗教、民族的権利の平等――は、彼らの大義名分を推進するのに一役買ったが、被統治者側がこの普遍性を真摯に受け止め始めると、それは厄介なお荷物となる。[62]こうして、《協会》の中でも最もラディカルな思想の持主であるミスリーが「反逆罪」で裁かれる素地が生まれた。

一九〇九年の反革命の鎮圧、イマーム・ヤフヤーとの和平交渉、リビアにおけるイタリア軍との戦いによって、ミスリーはすでに（幾分虚像も孕みつつ）カリスマ的名声を得ていた――よって、早くから当局の監視下に置かれてもいたが。[63]彼はまた、自身の見解を歯に衣着せず主張したために敵が多かった。ジェマル・パシャは、アラブ人に対するトルコ人の侮蔑的態度にミスリーが怒りを爆発させたと述べている。[64]その怒りの標的となった人物にアフメット・アガエフ（アーオール）――ロシア支配下アゼルバイジャンからの亡命トルコ人で、ある意味でミスリーと同じ境遇だった――がいた。ある日、自宅で例の構想をくどくどと話していたミスリーを客のアガエフがさえぎったのである。「卑しい」アラブ人やアルバニア人の存在を否定し、トルコ人によるアジア支配を宣言した彼をミスリーはその場から叩き出したのだった。[65]また、アヤ・ソフィヤで行なわれていた反アラブ色濃厚な説教や、コーランのトルコ語翻訳の動きに政治的意図を読み取ってもいる。[66]特に知られているのはエンヴェル・パシャとの確執だろう。「東地中海国家」構想の原型をすでに士官学校時代から抱いていたミスリーは、エンヴェルとは学生時代から犬猿の仲だった。対立はリビアで再び燃え上がる。[67]

ジェマルが述べるように、両者の対立には同世代ながら今や陸軍大臣にまで登りつめたエンヴェルと一介の中佐に過ぎないミスリーの間の微妙な心理的葛藤を無視できない。[68] だが、ミスリーからすれば、昇進が必ずしも能力主義でなかった点に歯噛みする思いだったろう。要するに、彼は政治的にうまく立ち回る能力に全く欠けていたのである。

いずれにしろ、陸相としてエンヴェルは軍の改革に乗り出し、大掛かりな「リストラ」を敢行した。[69] しかし、少なくともアラブ側にとって、改革の実態は軍の「トルコ化」に他ならなかった。アラブ人将軍たちの大量の引退と将校の配置替えが行なわれ、ミスリー自身もアンカラへの異動を命ぜられる。[70] 耐えがたく感じた彼はついに現役を去る決意をしたが、それは軍内に少なからぬ動揺を引き起こした。ミスリーの影響力を危惧したオスマン当局は、リビア戦争における公費流用を理由に彼の逮捕に踏み切る。だが、それは（たとえ事実だとしても）真の訴追理由ではなかった。その気があれば、当局は帰国直後に――つまり《協会》結成以前に――彼を逮捕できたはずである。軍内の秘密結社の発覚は、同時に統治者側の威信失墜を招きかねない。別件逮捕は、既存の支配イデオロギーと秩序に対するミスリーらの批判を瑣末な法的問題が持つ字義どおりの意味に矮小化してしまう意味で効果的だと見なされたのだろう。しかし、事態は統治者側の意図とは裏腹に、状況の政治化をもたらすことになる。

軍法会議の審理が当初の罪状から政治的な異端裁判――イタリア軍との内通、アラブの独立計画――への変質という経過をたどることによって、統治者側の意図は明らかとなった。彼らはミスリーの構想の向こう側にあるはずの「秘密の謀略」を疑っていたのである。ミスリーは「トルコ人の敵であり、とりわけエンヴェルの敵である。彼はトルコ国家への反逆者である」[71] という、ある検察側証人のあからさまな発言によってそれは裏付けられた。オスマン主義がトルコ主義という「特殊」を糊塗するイデオロギーに過ぎないと自ら公言してしまったのである。[72]

ミスリーの逮捕はオスマン帝国内外のアラブの抗議行動を引き起こした。これにイギリスなどの介入も加わり、ミスリーに対する死刑判決は破棄され国外追放処分で問題は決着する。[73] だが、あらゆる意味で政治的なこの裁判がもたらした影響は、単にこれ以降のアラブ・トルコ関

係の流動化にとどまらない。知識人のみならず大衆までをも巻き込んだ広汎な抗議運動は、アラブ会議以来のアラブ内部の対立をとりあえず解消――ザフラーウィーは運動において主導的役割を果たした――させることになる。イギリスの介入は、アラブ・トルコ関係が国際政治の一環に組み込まれている現実――それは「アラブの反乱」でより明確となる――をまざまざと見せつけもした。しかし最大の皮肉は、裁判にしろ、抗議行動にしろ、言わば「偶像化」されたミスリーをめぐって事態が展開されたことではなかったか。

ジェマルによるシリアでのアラブ政治運動弾圧（一九一六年）もオスマン＝アラブ主義者の「偶像化」に決定的な作用をもたらした。第一次世界大戦下のある種異常な雰囲気の中で行なわれたアレー軍事法廷における死刑判決は欠席分も含め八〇名にのぼる。[74] そして実際に処刑された三二名のなかにザフラーウィーも含まれていた。[75] 彼の《統一派》を中心とした政治力学への介入の試みは悲劇的な結末に終わったのである。無論、《盟約協会》からもジャザーイリーを始め四名の犠牲者を出した。[76] 「アラブ独立思想を生んだ代表的な指導者のひとりであり、将校の結社を設立した」[77] というのがジャザーイリーの判決理由であったが、具体的には一九一三年初頭のベイルートを舞台とした「シリア国家」樹立計画に関与したことにあるとされる。[78] この事件は（前節で言及した）アラブ人将校による「蜂起」計画の中でも最大のものであるし、オスマン＝アラブ主義の性格を考えるためにもここで取り上げておきたい。

一九一三年一月二七日、ジャザーイリーら四人を乗せたフランス国籍の船が極秘裏にイスタンブルを出航しベイルートに向かった。[79] 彼らは、ジャザーイリーが主宰した事前の秘密会合で、現在劣勢にあるバルカン戦争でオスマン帝国が崩壊した場合、その受け皿としてシリアにアラブ国家を創ること、[80] 元首としてエジプト副王家からウマル・トゥースーンを擁立すべきことを取り決めていた。[81] 配布されるべきマニフェストも作成済みであったという。[82]

ところで、ジャザーイリーはシリアの著名な思想家ターヒル Ṭāhir al-Jazā'irī の甥でもあり、[83] 《協会》中異色のこの人物は、叔父の文化サークルを通じて知識人との幅広い交友があった。[84] プロジェクトに参画したとされるザフラーウィー、リダー、アズム Rafīq al-'Aẓm ら《オスマン地方分権党》メンバーはいずれも当時エジプト在

住であり、彼らがいかなる役割を担っていたのか判然とはしないが、[85]おそらく副王との交渉や言論面での活動が期待されていたのだろう。[86]一方、ジャザーイリーはサラームら《ベイルート改革協会》の協力を取り付けることに成功し、やがて決起の日取りも決まる。[87]だが、プロジェクトは実行寸前で破棄された。フランスの在ベイルート総領事に「シリア問題はパリ、ロンドン、ベルリンで解決される」とにべもなく撥ねつけられたからである。[88]結局、帝国自体も崩壊を免れたのだった。

この事件は、第一次大戦以前のアラブ・ナショナリズムのポジティヴな側面を示すものとされてきた。[89]ジャザーイリーらはこのとき国旗（黒・白・赤の三色旗）や国歌まで用意し、[90]そのことはナショナル・ルーツの物語として集団的に記憶され神話化されてもいる。しかし、これをもってジャザーイリーがオスマン帝国の解体を意図していたと即断するのは早計に過ぎるのではなかろうか。事件はアラブ会議や《協会》結成以前のことであり、彼自身プロジェクトの中止後直ちにバルカンの前線に戻っている。

実際、ジャザーイリーは《協会》に加わったものの、アラブ会議には同情的だった。彼は、ザフラーウィーらが《統一派》と結んだ合意が満足行くものではなかったことは認めつつこう述べる。「だが、何ができるというのだ？ザフラーウィーが誤っていたとこの合意を批判することがわれわれにできるだろうか？もしザフラーウィーが政府と妥協しなかったら、われわれはより窮地に陥っていただろうから」。[91]ジャザーイリーのこの態度は、彼がシリア人だったことやザフラーウィーと長年の知己だったこと、さらに「青年トルコ」運動への関与がそうさせた改良主義的志向によるものでもあろう。[92]だが、それだけでなくジャザーイリーには政治的見解の多様性を認める寛容な精神があった。彼は、ちょうどトルコ人がそうであったように、多様な結社がそれぞれのやり方で目標を追求していくのがアラブの政治運動にとって望ましいと考えていたようである。[93]複数性や多様性の肯定は、叔父のサークルにおける知識人との「交通」を通じて育まれたものと言えようか。そうした意味ではセクト主義に傾きがちなミスリーとやや肌合いを異にしていたかもしれない。しかし、第一次大戦という例外状況はジャザーイリーのような立場をもはや許さなかった。のみならず、「アイデンティティ・ポリティクス」や「真の」オスマン主義をそれぞれ追求するオスマン＝アラブ

主義者たちに「オスマン」か「アラブ」かの二者択一を迫っていくのである。

五　オスマン国家とアラブ民族と

軍人と忠誠

第一次世界大戦の勃発当時、ミスリーはエジプトで亡命生活を送っていたし、一九一六年五月六日にはベイルートでジャザーイリーが処刑されたことにより、《盟約協会》は二人の指導的人物を失ってしまった。だが、そうした状況の中でミスリーに「ある程度取って代わったと思われる」[94]人物の台頭は、結社に転機をもたらすことになる。その人物こそ、ハーシミーに他ならない。「オスマン」か「アラブ」かの二者択一的状況のもと、彼は《協会》の進むべき方向をどう模索したのだろうか。

イラク地方を管轄する第六軍所属のハーシミーは、バグダードでの勤務を経てモースル第一二軍団参謀長となっていた。[95]この軍団は《協会》メンバーを多数擁しており、[96]ハーシミーは結社のモースル支部長でもあった。彼のイニシアティヴのもとで《バスラ改革協会》Jam'iya al-Baṣra al-Iṣlāḥīya との連携を模索するなど、同支部はイラクで活発な活動を展開している。[97]それが第一次大戦にともなう軍団のアレッポ異動によって、ハーシミーは運動の表舞台に登場することになった。彼はミスリー不在の《協会》を代表して、《青年アラブ協会》との連携や、[98]「ダマスクス議定書」の作成にも関与する。[99]シリアに臨時政府を樹立し、アラビア半島の在地勢力と結ぶといった具体的な「蜂起」プランも、裏づけとなる武力――彼の第一二軍団は「解放軍」Jaysh al-Khalāṣ と呼ばれていたという――を有するハーシミーの存在抜きには考えられまい。[100]アラブ・ナショナリズムの言わば「正史」に名高いこうした彼の行動は、ついにオスマン＝アラブ主義から大きく足を踏み出したかに見える。

だがその三年後、「アラブの反乱」のまさに最終舞台となったパレスティナの前線にオスマン軍第二四師団の師団長として姿を現したのは、誰あろうハーシミーその人であった。しかも、彼はファイサルの誘い――オスマン軍を離れてアカバに来るようにとの招請――をも断っていたのである。[101]その真意はどこにあったのか。

ハーシミーは使者に向かって「アラブ」軍への参加を拒否する理由を次のように語っている。[102]イギリスはファイサルと彼の父に対して誠実ではない。一方でアラブ国家の設立を約束しておきながら、ユダヤ人と同意してバ

ルフォア宣言を出し、フランスにはシリアを与えるという協定を結び、イラクをインドに組み込もうとしているではないか。彼はカイロで発行されている新聞『ムカッタム』を取り出し、イギリス政府の声明文を示して言う。そもそもフサインが自身をアラブ王（Malik al-'Arab）と号しているにもかかわらず、ヒジャーズ王（Malik al-Ḥijāz）の称号で呼ぶのは、まさに不実の前兆に他ならない。そしてハーシミーは最後にこう述べるのである。自分は軍人としての責務を放棄するわけには行かない、と。

現在われわれは、その後の歴史が彼の述べた通りに展開したことを知っている。ただ、その的確な状況分析の裏には、もともと彼が前述の「蜂起」計画の提携先としてハーシム家に難色を示していたこと[103]、そのせいもあってかファイサル個人との関係もややぎこちないものであった事情が存在したことを付け加えておくべきかもしれない[104]。

それにしても、ハーシミーは「蜂起」をそもそも実行に移すつもりだったのだろうか。いずれにせよ、その機会は彼に警戒の念を抱いた軍当局がイスタンブルへの異動を命じたことによって永遠に失われた。再びパレスティナに現れるまでの時間を、彼はガリポリや東欧での転戦に費やすことになる[105]。ファイサルの使者に述べたように、将官にまで登りつめた彼は帝国への忠誠を維持しつづけた。オスマン国民として国家のあり方に対してどれだけ批判的であったとしても、軍人としての職務遂行においてはこれに忠実でなければならない。彼の論理には、オスマン＝アラブ主義がもつ「主体化」と「臣民化」の等価性を垣間見ることもできる。しかし、そこから次のような仮説が浮かんでくるのではないか。つまり、彼はミスリーのいないオスマン帝国で《協会》結成の趣旨に忠実であろうとしたのだ、と。「ダマスクス議定書」などへの積極的な関与は、そうすることで運動をコントロールし、アラブ地域における秩序の「空白」――当然英仏の進出が予想される――に備えることにあったのではなかったか。ハーシミーは「蜂起」計画へのヒジャーズからの軍事支援の申し出を「アラブ運動の指導者となることについて、シャリーフ・フサインの決心以外のものは必要としません」と断っている[106]。これはハーシム家に対する好悪の感情から出た言葉というよりは、運動の主導権をあくまで自身の掌中に収めつづける意志表明とも受け取れよう。だとすれば、彼はオスマン＝アラブ主義をめぐって危うい綱渡りをしていたことになる。

ある「転向」の軌跡

ハーシミーのナショナリズムへの接近が「偽装」されたものだとすれば、「アラブの反乱」に進んで身を投じ、のちのアラブ諸国家システムをある意味で体現する人物となったサイードは完全に「転向」を果たしたと言えるだろう。サイード論の多くが彼を「現実主義者」と評していることからすれば、[107]これもその一環であるかもしれない。そうした有力な見解を念頭において、事柄の実態を見定めるのがこの項での課題となる。

第二節で触れたように、サイードはオスマン帝国の存在をもともと否定していない。「帝国では、ムスリムとして、アラブ人はトルコ人のパートナーだった。彼らは、人種的区別なくトルコ人と権利と責任を共有していた。国家における高位が、軍人や官僚に限らずアラブ人に開かれていた。彼らは議会の上下両院に代表を有していた。多くのアラブ人が大宰相、シャイフ・アル＝イスラーム、将軍や州総督となり、アラブ人は国家行政の全ての職位に常に見出せた」[108]と述べる彼がトルコ人に格別敵意を抱いていたはずもない。《盟約協会》の「綱領」に賛同していたというムスタファ・ケマル――のちのアタチュルク――をはじめとして政権中枢から距離をおくトルコ人との親交もあった。[109]サイード自身、トルコ系だったとも言われているのである。[110]

では、彼はなぜ「アラブの反乱」に加わることになったのか。本人はこの間の事情を《統一派》によるパン＝トルコ運動に帰している。[111]だが、実際のアラブ政治運動の経緯がそれほど単純でないことは、すでにこれまでの行論から明らかにしえたと思う。彼個人の動向に目を向ければ、その転換には大きな跳躍が必要だったことが分かる。

ミスリーがエジプトに追放されると、イスタンブルにいたサイードはオスマン帝国を出国する決心をした。ミスリーを追ってカイロに向かうか、故郷であるイラクを通ってそのままアラビア半島へ抜けるか。彼は後者を選んだが中途で病に倒れてしまう。病院で治療を受けているうちに第一次大戦が始まり、バスラへイギリス軍が上陸してきた。回復したサイードはイギリス当局に働きかけ、やがてインド経由でエジプトに向かう。[112]その後の活躍はよく知られているとおりであるが、ここで注意しなければならないのはサイードと「アラブの反乱」に参加した他の軍人たちとの間にある隔たりである。彼の立場は、緒戦でイギリス軍に投降して「反乱」に加わった

《協会》メンバー――大戦以前の結社加入者のうち、「反乱」参加者は約三割に過ぎない[113]――とは異なる。また、リビアからオスマン軍人としてサヌーシー教団とともにエジプトに侵攻して捕虜となり[114]、ジャザーイリーの処刑に衝撃を受けて「アラブ」軍に志願したサイードの義兄アスカリー Ja'far al-'Askarī――彼は結社メンバーではなかった――とも違うだろう[115]。ミスリーを追ってオスマン軍を離れた瞬間に、サイードはもう後戻りできない道を走り始めていたのである。

当時のサイードについて考えるとき、その若さも見逃すことはできない。われわれは後年の老獪な政治家、「現実主義者」サイードをひとまず忘れる必要があるだろう。二六歳という年齢は《協会》幹部の中でも最年少に属する。彼はミスリーやジャザーイリーらと異なり改良主義的な「青年トルコ」運動の経験もない。「ヌーリー・サイード――彼は私にとって素朴な空想社会主義者のように思われる――は、二五歳くらいの繊細なアラブの若者であり…非常に西洋化されている」とあるイギリス当局者は述べてこう続ける。「彼は…アラブが、他のどこよりもリベラルなイギリスの支配のもとで、より容易に彼ら［アラブ］の理想を達成できると考えている」[116]。この「協力メカニズム」（R・ロビンソン）の作動を髣髴とさせるサイードの発言にいかなる思惑が込められていたにせよ、帝国主義を充分に認識していたとは必ずしもいえない。無論、時代の雰囲気もあった。ヒジャーズに出発する直前、エジプトに滞在していた彼はザグルール Sa'd Zaghlūl と出会っている。エジプト民族主義者として知られるザグルールは、「アラブの反乱」に対する当事者意識はまるでなかったが、それでもアラブの願望を表現する機会としてサイードに「反乱」への参加を激励したのだった[117]。

だが、オスマン帝国との訣別に向かいつつあるサイードを一回り年上のミスリーはどのように見ていたのか。両者それぞれと会見したある人物はこんなふうに記している。「しかし、この関係に注目してほしいのだが、彼［サイード］はアジーズ［ミスリー］の信頼を完全には得ていないようだ。私は、アジーズが彼を疑っていると言おうとしているのではない。ただ私は、彼［ミスリー］が、彼［サイード］はかなり若くてこの種の事柄で完全に信頼するまでには成熟していない、と考えていると思う」[118]。

第三の道

シャリーフ政府の陸軍大臣から流謫の亡命者へ、「アラブの反乱」におけるミスリーの行動は迷走の軌跡に見える。それゆえにさまざまな批判が各論者によってなされてきた。[119] 彼はなぜ「アラブの反乱」から離脱したのか。あらかじめ結論を先取りして言えば、「オスマン」と「アラブ」の二者択一を迫られるなかで、彼の行動の根底にあったものはオスマン＝アラブ主義の最後の探求だったのである。

一九一六年二月五日付書簡で、ミスリーはイギリスのキッチナー陸相に対してアラブの政治的傾向を二つの潮流に整理してみせた。[120] 第一に、オスマン帝国からの完全な分離とアラブ帝国――その境界として、北はアダナ、ヴァン両州、東はペルシア、バスラ海、オマーン海、西は地中海、エジプト、紅海、南はインド洋[121]――の復興。そして第二に、オーストリア＝ハンガリーに擬せられたトルコ＝アラブ帝国のハンガリーとなること。選択肢のひとつとしてではあるが、彼はついにアラブ独立の可能性を示唆するようになった。実際、英国外交資料から浮かび上がるのは、第一次世界大戦勃発以後、まずその起点としてイラクにおける「蜂起」を主張して、イギリスの歓心を買おうとするミスリーの姿である。

もっとも、彼の言動は必ずしも一貫しない。だが、われわれはむしろこの一貫性の欠如にこそ注意を向けるべきなのである。イラクにアラブ国家を樹立しても軍事的・経済的に維持が難しい。個人的にはイギリスに併合されたほうが良いと思う。けれども、もし併合しないと確約してくれるなら、イギリス軍に抵抗しないように現地のオスマン軍アラブ人将校やベドウィンらを説き伏せよう。[122] このように誘うミスリーは、二の足を踏むイギリス当局者へ向かって挑発も辞さない。分裂状態にあるアラブは、イギリスとオスマン帝国を秤にかけて強者の陣営につくしかないのだと。[123] その一方、彼はフランスの当局者にはこのように語っている。[124]「イギリスは、メソポタミア、アラビア［半島］、パレスティナを望んでいる。彼らはイスラーム世界を支配することを欲している」。よって、「フランスとアラブの努力の結合だけが、トルコに平和を余儀なくさせることができ」イギリスの野心を抑えることも可能だと、ミスリーはフランスの自尊心をくすぐるのである。こうして英仏両国を牽制したうえで、オスマン帝国の第一次大戦への参戦に動揺する《盟約協会》メンバーに対しては、安易に外国の誘惑に乗ら

ないよう自制を求める。[125] ここまでくれば、彼の姿勢はある原則にもとづくものであることが判るだろう。

その手がかりを彼自身の言葉から求めることができる。「われわれは、戦争の欲求から、トルコへの憎悪から、あるいはイギリスへの好意から戦うのではない。われわれの大地の解放（tahrīr）とその自律（istiqlāl）の保障のために戦うのだ」。[126] アラブ帝国の復興にせよ、オスマン帝国にとどまる――むろん現存支配体制は打破されねばならないが――にせよ、彼にとって重要なのは、「解放」と「自律」である。ミスリーは英仏両国に幻想を抱いてはいなかった。「新たなアラブ諸国家が樹立されたとしても、それがインドや北アフリカにおける〝西洋帝国主義〟のための道具となってはならない」。[127] では、彼は「解放」や「自律」を具体的にどのように実践しようとしていたのか。彼が「蜂起」計画を英仏両国に執拗にもちかけたのは、単なる牽制以上の苦肉の策によるものだったように思われる。ミスリーは一介の追放者に過ぎず、また彼に対する警戒も根強い。[128] いかなるかたちであれ、まず闘争の基盤を確保することが先決であった。その先のプランとしてミスリーの念頭にあったのは、キッチナーに示した二つの選択肢のいずれでもなく、やはり例の「東地中海国家」構想の改訂版だったはずである。[129] 「それは四ないし五つに分割された自治国家からなるもの」で、（1）ヨーロッパ・トルコ、アナトリア、[130]（2）クルディスタン、[131]（3）アラブ・トルコ、[132]（4）ヒジャーズ、アシール、イエメンから構成される。ここでフサインの処遇が問題となるが、彼はヒジャーズ王としてちょうどドイツ皇帝――ここではもちろんオスマン家のスルタン＝カリフ――に対するバイエルン王のような立場に過ぎない。[133] 「クルディスタン」の設定はこの構想の出色であるが、《協会》に最後まで残ったクルド人の存在が、ミスリーにそうさせたように思われるのである。[134] しかし、彼の構想は周囲に十分理解されたとはいえない。イギリス当局者は次のようなコメントを記している。「彼ら［アラブ］の The Metropolitan State（コンスタンティノープル、アナトリア）との連合は…大英帝国とその植民地もしくは自治領のようなものである」。ミスリー本人ですら、おそらく無知ゆえに「オーストリアとハンガリーの関係のようなもの」と注釈を加えている。オーストリア＝ハンガリーがスラヴ諸民族の犠牲の上に成立したことを知っていれば、そのようなアナロジーを持ち出すことはなかったであろう。「東地中海国家」が当時の

常識からして、いかに表現困難な願望だったかが窺われる。

英仏との駆け引きがはかばかしくない状況で、イギリスの保護・後見のもと「アラブの反乱」の盟主となったフサインに対するミスリーの評価が低いのは、「解放」と「自律」の原則からいって当然だった。個人的能力はともかく、フサインは軍事指導者としての素質に欠けている。さらに問題なのは「民衆の革命運動への猜疑心を特に強く抱き…ロシア皇帝の廃位にひどくショックを受け不安に駆られていた」彼の姿だった。かつての「青年トルコ人」ミスリーの眼には、フサインがアブデュルハミト二世と二重写しになって見える。[135] エジプト副王アッバース・ヒルミーとの個人的関係やイブン・サウードへの働きかけも何ら生み出すことはなかった。完全にイニシアティヴを奪われるかたちとなったミスリーはイギリスの要請で不本意ながらヒジャーズに向かう。とはいえ、これで彼は熱望した道具立てをついに手に入れたことになる。構想の実現をあせってフサインとことごとく対立したミスリーは、メディナのオスマン軍と連携してフサインを排撃するという一種のクーデタを図った。だが、政治的な術策を弄しすぎた彼に従う者はもはやほとんどいない。ミスリーは辞職して、失意のうちにエジプトへ戻らざるを得なかった。[136]

一九一八年初頭、気を取り直した彼はドイツ経由で今度はイスタンブル入りするために、中立国のスペインに向かう。しかしスペインから出ることすらかなわず、むなしく時間が経過していく。そんな彼にとって、ドイツ敗北の知らせは絶望のあまり自死すら考えさせるほどの衝撃だった。第一次世界大戦の終焉は「東地中海国家」構想の最終的な破綻を意味していた。彼にとって、オスマン帝国は構想の中核となるべきかけがえのないものだったのである。そうした帝国に対する愛憎を超えた感情は、意外にも、不倶戴天の敵であるエンヴェル・パシャへの書簡に表れていたともいえるのではないか。

私は今日付でオスマン軍を去りますが、過去の軍隊生活は私を固い絆に結びつけ、その日々を胸の奥に刻みつけています。よって、もし戦争が起こり、祖国（watan）がその息子たちを必要としたならば、陸軍大臣閣下は、私を指揮させる部隊に任命するためにエジプトのオスマン政府代表部を通じて私の滞在場所をお探しください。[137]

だが、もちろんそれは彼が現存のオスマン政府を肯定

していたことを意味するわけではない。のちに、エンヴェルは反英活動にアラブを利用するため、ミスリーを本当に呼び戻そうとしたが拒絶されたようである。[138] ミスリーはあるフランス当局者との会見で、彼の真意を測りかねている当局者の疑念に反発して次のように答えたが、これほどオスマン＝アラブ主義のスタンスを端的に説明して見せた言葉はないだろう。

あなたは、私がトルコ人に対する裏切りのために活動していると思われるのですか。決してそうではない。私は権力を握り帝国を敗北に導こうとしている党［《統一派》］に対して戦っているのです。そして私の計画の実行だけが、救いの道なのです。[139]

六　結語

一九一八年一〇月三日、ファイサルがダマスクスに入城して、「アラブの反乱」はそのクライマックスを迎えた。アントニウスはこう書いている。[140]

［ファイサルの入城は］市民にとって自由の実現のように思われ、彼らにとってその自由とは、トルコの桎梏からの脱却だけに止まらず、同時に長年抱いた夢が実現したことを意味したのである。

アントニウスが同時代人として、オスマン帝国からの独立を「長年抱いた夢」と言い切ったとき、オスマン＝アラブ主義者たちのディレンマは熱狂の中で忘れ去られたのであろうか。ところがこうした「正史」とは裏腹に、その後の修正論的な諸研究は、ファイサルを戴く「シリア王国」を構成したのがかつての「体制派」オスマン主義者――《統一派》の支配のもとではほとんど沈黙していたにもかかわらず、今や権力の座についた――であった現実をわれわれに教えてくれる。つまり、ありていに言えば、運動を推し進めて厳しい戦いを潜り抜けてきた者たちは、その恩恵を享受した者たちと必ずしも同一人物ではなかったということになるだろう。[141] これを第一次大戦以前のアラブ・ナショナリズムの限界と見なす、あるいは「普遍」的性格の類似によるオスマン主義からアラブ・ナショナリズムへのパラレルな移行として捉えるのはたやすい。[142] だが、問題は残る。果たしてオスマン＝アラブ主義者の位置づけはどうなされるべきなのか。[143] オスマン＝アラブ主義は単なるプロセスとして捉えられるべきなのか。最後にそれを検討しなければならない。

オスマン＝アラブ主義は、「普遍」オスマン主義の変種である「特殊」オスマン主義に対する抵抗であったと

みなしうる。この「特殊」オスマン主義はトルコ・ナショナリズムやトゥラン主義を内に含みつつ、必要に応じて「イスラーム」をも効果的に利用するものであった。オスマン＝アラブ主義者は、これを本来的「普遍」オスマン主義からの逸脱と見なし、逆にオスマン主義の「普遍」性を拠りどころとして帝国の多民族国家への変革を求めたのである。ただし、アラブ側による「普遍」オスマン主義解釈はひとつの問題を孕んでいた。元来オスマン主義は、オスマン・「ステイト」に民族・宗教を超えた、つまり一元化されたオスマン・「ネイション」を創造する思想であり、アラブの個別性を構成要素におくオスマン＝アラブ主義者の主張とは矛盾する。だが、支配的イデオロギーが「トルコ化」政策とオスマン主義の欺瞞的な関係の産物である以上、被統治者側は「普遍」の主体的な読み換えを行なうことでこれと対抗せざるをえなかった。つまり、彼らは「ネイション」と「ステイト」を峻別することにその論理を見出したのである。[144]

しかし、こうした抵抗のあり方は常に危険と隣り合わせである。事実、オスマン＝アラブ主義者内部に「普遍」の定義や運動の手法をめぐって分断線が走っていたことは疑い得ない。まず一方に、アラブ会議に参加したグループがある。彼らはアラブという個別的アイデンティティを強調し、ナショナル・マイノリティとして自らにふさわしい地位をオスマン帝国内部で確保しようとした。だが、この「アイデンティティ・ポリティクス」は利権交渉のプロセスを経ることによって、多かれ少なかれ、普遍的合意の見せかけのもと安易な妥協がなされがちである。その結果、被統治者側は固有の場所を割り振られることで運動の政治性を剝奪されてしまう。なぜなら、イデオロギーに対する虚偽意識を統治・被統治両者ともに共有してしまっているからである。加えてシリアという共同性への傾斜は、政府が帝国の「イスラーム」による一体性を強調していくなかで、ムスリム・キリスト教徒間の微妙な関係を逆に浮き彫りにしたように思われる。

それに対し、《盟約協会》はオスマン主義をむしろ真面目に受け取ることで、妥協的な制度の破壊を意図した。「盟約」というシニフィアン、アラブのみではない多民族からなるメンバー、多元主義に「東地中海人」の同質性をも加味した「東地中海国家」構想のもと、より「普遍」的なものへの同一化――「真の」オスマン主義――を目指したのである。「国民」としての平等性の希求と

「民族」としての自己正当化がもたらす陥穽との相克のなかで、民族的アイデンティティよりさらに視野を拡大したこの構想には、帝国主義体制における「差別の克服と連帯の獲得」[145]への希望が萌芽的なものにせよ孕まれていたとはいえまいか。ただし、オスマン＝アラブ主義を特徴づける内容と形式の間にある緊張関係は蔽うべくもない。彼らの多元主義という積極的な教義も、たいていの場合、秘密結社という表現方法や組織形態と明らかに衝突していたのである。

こうした抵抗運動に統治者側はどう対応しようとしたのであろうか。当然のことながら、自らの政治的枠組に再度包摂しようとすることになる。その際、アラブ会議と《協会》それぞれの区別が行なわれたことは、両者の性格の相違を逆に立証するものだろう。つまり、前者を理性的な議論の対象としたのに対して、後者には国家への反逆者であるとの烙印（スティグマ）を押したのだった。しかし、これはむしろ状況を政治化してしまい、ミスリー裁判はアラブによるオスマン帝国からの離反を決定づける一因となってしまう。

オスマン帝国から「シリア王国」――オスマン主義からアラブ・ナショナリズム――への移行に際して何が起こったのか。事後的に見れば、アラブ・ナショナリズムの歴史は常に法則に支配された過程として、つまり一連の意味あるプロセスとして読むことができるかもしれない。《協会》ですら、ある一面を取り上げさえすればそうした読みは可能であるし、実際に行なわれてもきた。だが、プロセスに身を置く当事者にとって事態は決して必然なものではない。それどころか未決定な可能性としてそれぞれの決断を迫られているのである。われわれがオスマン＝アラブ主義者、とりわけ《盟約協会》の行動を通じて、既存体制の崩壊から新秩序の誕生の間隙に目撃するのは、ある種の亀裂＝「開かれ」だったといえるだろう。すなわち「ネイション」と「ステイト」との間の「開かれ」である。彼らのオスマン帝国へのパトリオティズム（愛国主義）は、統治者側が「トルコ化」によって想像＝創造しようとした「ネイション」ではなく、「ステイト」としての帝国への情熱と利害に裏打ちされたものだったろう。と同時に、アラブ・「ネイション」に対する記憶と忠誠も彼らにとっては自明のことであった。[146]しかし、新たなシステム――「アラブの反乱」の成果としての「シリア王国」――が自らを（一時的にせよ）確立した瞬間にオスマン＝アラブ主義者は不可視と

なる。ザフラーウィーやジャザーイリーらは字義どおり「消失」することでナショナリストとなり、さらに《協会》の場合、民族主義結社として転形を遂げた挙句、「イラク」「シリア」二派に分裂した。こうした彼らの自壊には、「消え行く媒介者 vanishing mediator」のアイロニーがある。われわれがオスマン＝アラブ主義者を「国民国家」形成やナショナリズムの観点から過小評価せざるを得ないとすれば、それは彼らがむしろ「消え行く媒介者」としての役割を全うした結果なのである。われわれはオスマン＝アラブ主義が仲介することなしには、直接的にオスマン主義からアラブ・ナショナリズムへ移行することはできなかったことを、まず押さえる必要があるだろう。「消え行く媒介者」は状況の未決性が失われ、大文字の歴史が直線的進化の自明性を獲得した瞬間に見えなくなる。こうしてオスマン＝アラブ主義者は、新たに台頭した支配的イデオロギーによる創造の産物――「シリア王国」――を前にしてその役割を終えたのだった。[147]

ここで《協会》のその後の運命をたどるのはもはや本稿の課題を越えている。《協会》のメンバーが、自分たちが実際に得たものではなく、何か別のものを欲していたということ、つまり、多様な名義（「盟約」や「東地中海国家」など）によって示される、不可能な充溢性に満ちたユートピア的対象を求めていたことは、もはや明らかであろう。しかし、第一次大戦後の状況は、彼らをして「国民国家」という新たな共同性のなかに絡め取られることを余儀なくさせた。[148] それは、ハーシミーやサイードをイラクの寡頭政治家とし、ミスリーをすら一九五二年のエジプト「革命の霊父」たらしめるほどに苛烈なものだったのである。

註

（1） オスマン主義の様々なヴァリエーションに関しては次を参照。Arai, Masami, *Turkish Nationalism in the Young Turk Era*, Leiden, E.J. Brill, 1992. 新井政美「ムスタファ・レシト・パシャからアフメット・アーキフへ――「オスマン国民」概念の淵源と影響とに関する素描」『人文研究』第四四巻第一二分冊（一九九二年）、九八一―一〇〇〇頁。いわゆる「トルコ化」については議論の分かれるところだが、その問題の本質は実際の政策云々にあるというより、政府による集権主義とトルコ・ナショナリズムの無自覚な結びつきにこそあったのではないか。後述するように、「トルコ化」を批判していたのは「帝国からの分離独立を図る人々」のみではなかったことが、逆にそれを証明している。同『トルコ近現代史――イス

ラム国家から国民国家へ』みすず書房、二〇〇一年、一三〇頁。

(2) Zeine, Zeine N., *The Emergence of Arab Nationalism with a Background Study of Arab-Turkish Relations in the Near East* (rev. edn), Beirut, Khayats, 1966; Dawn, Ernest C., *From Ottomanism to Arabism:Essays on the Origins of Arab Nationalism,* Urbana, University of Illinois Press, 1973; Khalidi,Rashid Ismail, *British Policy Towards Syria and Palestine, 1906-1914: A Study of the Hussein-McMahon Correspondence, the Sykes-Picot Agreement, and the Balfour Declaration,* Oxford, The Middle East Centre, St Antony's College and Ithaca Press, 1980; Khoury, Philip S., *Urban Notables and Arab Nationalism: The Politics of Damascus 1860-1920,* Cambridge, Cambridge University Press, 1983. また近年の代表例としては以下のものがある。Khalidi, Rashid, et al., (eds.), *The Origins of Arab Nationalism,* New York, Columbia University Press, 1991; Haddad, Mahmoud, "The Rise of Arab Nationalism Reconsidered", *International Journal of Middle East Studies,* Vol.26, No.2 (1994), pp.201-222. あるいは以下の諸論文も参照。Hourani,Albert, *"The Arab Awakening* Forty Years After", *The Emergence of the Modern Middle East,* London, Macmillan, 1981, pp193-215. 臼杵陽「アラブ民族主義の再検討」『歴史学研究』五三四号（一九八四年）、一二四―一三一頁。

(3) Antonius, George, *The Arab Awakening: The Story of the Arab National Movement* (rep. edn), Beirut, Khayats, 1969. ジョージ・アントニウス、木村申二訳『アラブの目覚め――アラブ民族運動物語』第三書館、一九八九年。原書は一九三八年にロンドンの Hamish Hamilton から刊行された。同書の「ナラティヴ」の問題に関する修正論的立場からの検討については次を参照。Cleveland, William L., "The Arab Nationalism of George Antonius Reconsidered", in J. Jankowski and I. Gershoni (eds.), *Rethinking Nationalism in the Arab Middle East,* New York, Columbia University Press, 1997, pp. 65-86.

(4) Dawn, "The Rise of Arabism in Syria", *op. cit,* pp. 148-179 (First Published in 1962). とはいうものの、アラブ主義の定義をめぐっては論者の間でずれが見られる。術語の提唱者であるC・E・ドーンがイスラーム改革思想との関連を強調しつつ、その担い手に名望家層を措くのに対し、ラシード・ハーリディーはプロフェッションの役割を重視する。また、ドーンにおいてはオスマン主義とアラブ主義が陣営選択の問題に還元されがちなのに対し、ハーリディーは前者を集権論、後者を分権論による政策の相違として捉えている。両者の論争に関しては、古林清一「アラブ民族主義研究史覚見」『人間関係論集』第一〇号（一九九三年）、三五―四五頁。

(5) あるいは帝国の「イスラーム国家」志向を強調し、ナショナリズムの役割を重く見ないイスラーム主義的修正論もありえよう。最近の一例として、アラブ、欧米のみならずオスマン側史料を駆使したハサン・カヤルの研究

を参照。Kayalı, Hasan, *Arabs and Young Turks: Ottomanism, Arabism, and Islamism in the Ottoman Empire, 1908-1918*, Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1997.

(6) オスマン主義の定義をオスマン国家の維持を究極的な目的とするあらゆる政治原理として拡張した場合、ここでいうオスマン＝アラブ主義をアラブによる分権的あるいは多元的なオスマン主義と見なすことも可能だろう。だが、近年のオスマン帝国史研究において常識に属するこうしたオスマン主義の拡張的解釈は、前掲註4で示したように「アラブ主義」が分権論的なニュアンスをも含む以上、アラブ・ナショナリズム研究との比較分析の際にかえって混乱をきたしてしまう。分権あるいは多元的といっても、それがイスタンブルからの視点なのか、もしくは周辺諸地域からのものなのかでかなりニュアンスが異なってくるだろう。本稿の関心は、むしろ分権論内部の様々な潮流を分類していくことにあるが、誰にとっての分権論かをまず明確にするためにオスマン＝アラブ主義の語を用い、オスマン主義に関してはタンジマート以来の狭義の定義を採ることにする。なお、ここでいうオスマン＝アラブ主義はハプスブルク帝国のチェコ人による「オーストリア＝スラヴ主義」を下敷きにしているが、多民族国家における政治的マイノリティとしての両者の符合も検討すべき論点といえる。なかでも「パラツキー書簡」は、支配イデオロギーとしてのオーストリア理念をチェコ側が読み換えた事例として評価できよう。同書簡の全訳については、矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究』岩波書店、一九七七年、一〇二―一〇九頁を見よ。

(7) その対象として取り上げるのは次の通り。サリーム・アル＝ジャザーイリー Salīm al-Jazā'irī（一八七九―一九一六年）、ヤーシーン・アル＝ハーシミー Yāsīn al-Hāshimī（一八八二―一九三七年）、ヌーリー・アッ＝サイード Nūrī al-Sa'īd（一八八八―一九五八年）。

(8) プロフェッションとしての軍隊の独特な性格を論じたものに次の文献がある。Finer, S.E., *The Man on Horseback: The Role of Military in Politics* (2nd edn), Boulder and London, Westview Press and Pinter, 1988. オスマン帝国のケースに関しては、鈴木董「「近代軍」形成期のオスマン帝国における軍人と政治―一八二六―一九〇八年―」日本政治学会『年報政治学―近代化過程における政軍関係』岩波書店、一九八九年、一八七―二〇九頁。

(9) Tauber, Eliezer, *The Emergence of the Arab Movements*, London, Frank Cass, 1993; *idem, The Arab Movements in World War I*, London, Frank Cass, 1993; *idem, The Formation of Modern Syria and Iraq*, London, Frank Cass, 1995. その他《協会》を本格的に扱った注目すべき研究として、ハッサン・サアブの著作がある。以下の特徴的なタイトルが示すように、一見われわれの問題意識と通底するが、アラブ・ナショナリズムの隆盛という時代状況に多分に影響を受けていることも否定できない。Saab, Hassan, *The Arab Federalists of the Ottoman Empire*, Amsterdam,

Djambatan, 1958. なお本稿が扱う時期について邦語の包括的な研究として木村喜博『東アラブ国家形成の研究』アジア経済研究所、一九八七年、酒井啓子「イラクにおける国家形成と政治組織（一九〇八―一一〇年）」酒井編『国家・部族・アイデンティティー―アラブ社会の国民形成』、アジア経済研究所、一九九三年、七九―一四二頁。

(10) 「青年トルコ」運動の多様な運動形態に関しては次を参照。Hanioğlu, M. Şükrü, *The Young Turks in Opposition,* Oxford and New York, Oxford University Press, 1995. 特にトルコ人のアラブ観については以下を見よ。*idem,* "The Young Turks and the Arabs before the Revolution of 1908", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.,* pp. 31-49.

(11) アラブ地域とオスマン政府の関係をめぐっては以下を参照。Akarlı, Engin, "'Abdūlhamid II's Attempt to Integrate Arab into the Ottoman System", in D. Kushner (ed.), *Palestine in the Late Ottoman Period,* Jerusalem and Leiden, Yad Izhak Ben-Zvi and E.J. Brill, 1986, pp. 74-89; Blake, Corinne, "Training Arab-Ottoman Bureaucrats: Syrian Graduates of the Mulkiye Mektebi 1890-1920", Ph.D.diss., Princeton University, 1991.

(12) 同結社はムスリムとキリスト教徒がそれぞれ同数で構成されていた。Sa'īd, Amīn. 1934. *al-Thawra al-'Arabīya al-Kubrā,* al-Qāhira, Maṭba'a 'Īsā al-Bānī al-Ḥalabī, 1934, Vol.1, pp. 18-23.

(13) 一九一一年英国の支持のもと結成。*Ibid.,* pp. 14-18; [As'ad Dāghir], *Thawrat al-'Arab: Muqaddimātuhā, Asbābuhā, wa Natā'ijuhā,* al-Qāhira, Maṭba'a al-Muqaṭṭam, 1916, pp. 57-62. 以下では *Thawrat al-'Arab* と略す。

(14) 一九〇九年結成の秘密結社。Sa'īd, *al-Thawra...,* p. 9; Darwaza,Muḥammad 'Izzat, *Ḥawla al-Ḥaraka al-'Arabīya al-Ḥadītha,* Ṣaydā', al-Maktaba al-'Aṣrīya, 1949-1952, Vol.1, pp. 27, 30.

(15) 彼の思想については次の論文を参照。Tarabein, Ahmed, "'Abd al-Hamid al-Zahrawi: The Career and Thought of an Arab Nationalist", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.,* pp. 97-119.

(16) [al-Khaṭīb, Muḥibb al-Dīn], *al-Mu'tamar al-'Arabī al-Awwal al-Mun'aqid fi al-Qā'at al-Kubrā lil-Jam'īya al-Jughrāfīya bi Shāri'a San Jirman fī Baris,* al-Qāhira, al-Lajna al-'Ulaya li-Ḥizb al-Lāmarkazīya, 1913/1333, p. 7. 以下、*al-Mu'tamar* と略。

(17) *Ibid.,* pp. 113-119; Mūsā, Sulaymān, *al-Ḥaraka al-'Arabīya: Sīra al-Marḥala al-Ūlā lil-Nahḍa al-'Arabīya al-Ḥadītha, 1908-1924* (3rd ed.), Bayrūt, Dār Nahār, 1986, pp. 39-40.

(18) *Ibid.,* p. 38. アルスラーンに関しては次を参照。Cleveland, William L., *Islam Against the West: Shakib Arslan and the Campaign for Islamic Nationalism,* Austin, University of Texas Press, 1985, ch. 1.

(19) *al-Mu'ayyad* (3. 5. 1913), p. 4. Haddad, *op. cit.,* p. 217 より再引用。

(20) ムトラーンNadra Muṭrān（パリ代表キリスト教徒）

の発言。*al-Mu'tamar,* pp. 66-74.

(21) Salibi, Kamal S., "Beirut under the Young Turks: As Depicted in the Political Memoirs of Salīm 'Alī Salām", dans J. Berque et D. Chevallier (dir.), *Les Arabes par leurs archives, XVIe-XXe siècles,* pp. 193-215, Paris, CNRS, 1976, p. 210. 会議においても、帝国主義に対する認識において、ムスリムとキリスト教徒の間に鋭いコントラストを見出せる(*al-Mu'tamar,* pp. 46ff.)。

(22) Salibi, *op. cit.,* p. 210.

(23) Sa'īd, *al-Thawra...,* p. 43; Haim, Sylvia G. (ed.), *Arab Nationalism: An Anthology,* Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1962, p. 33.

(24) 彼に関しては以下を参照。Khalidi, "'Abd al-Ghani al-'Uraisi and *al-Mufid* :The Press and Arab Nationalism before 1914", in M.R. Buheiry (ed.), *Intellectual Life in the Arab East, 1890-1939,* Beirut, Center for Arab and Middle East Studies, American University of Beirut, 1981, pp. 38-61.

(25) *al-Mu'tamar,* p. 43.

(26) *Ibid.,* p. 115. たとえ英国人の刺激を避ける思惑があったにせよ、これは決して会議だけの特殊例ではない。「真性」アラブ・ナショナリストのひとりであるアーズーリー Najīb Azūrī あるいは《文芸クラブ》al-Muntadā al-adabī における議論を見よ。Wild, Stefan, "Negib Azoury and his Book *Le Reveil de la nation arabe",* in Buheiry (ed.), *op. cit.,* pp. 92-104; Dāghir, As'ad, *Mudhakkirātī 'alā Hāmish al-Qaḍīya al-'Arabīya,* al-Qāhira, Dār al-Qāhira lil-Ṭibā'a, 1959, p.70.

(27) al-Baṣīr, Muḥammad Mahdī, *Ta'rīkh al-Qaḍīya al-'Irāqīya* (2nd edn), London, LAAM, 1990, p. 25.

(28) *al-Mu'tamar,* pp. 150-210; Aḥmad Shafīq, *Mudhakkirātī fī Niṣf Qarn,* al-Qāhira, Dār Majallatī, n.d., Vol.3, p. 82.

(29) ザフラーウィーのラシード・リダー宛書簡(一九一二年一月一二日付)。Rashīd Riḍā, "al-Sayyid 'Abd al-Ḥamīd al-Zahrāwī", *al-Manār,* Vol. 19, No.3 (1916), p. 179.

(30) 「幹部」五四人中、七八%を軍人が占める。Tauber, *Emergence...,* p. 297. その総数については、三一五から数千規模まで諸説ある。Sa'īd, *al-Thawra...,* Vol. 1, p. 47; Dāghir, *op. cit.,* p. 36.

(31) Aḥmad Shafīq, *op. cit.,* Vol.3, p. 82. これより前、ムスリムはより広い知識層からなる《カフターン協会》al-Jam'īya al-Qaḥṭānīya に参加していた。だが、その活動は秘密保持に失敗——その詳細は明らかでないが——したために事実上解散せざるを得なかった。メンバーをほぼ軍人に限定した理由には体制に妥協的な知識人に対するムスリムの不信感がある。Antonius, *op. cit.,* p. 119. 邦訳、一一三頁。

(32) Birrū, Tawfīq, *al-'Arab wa al-Turk fī al-'Ahd al-Dustūrī al-'Uthmānī 1908-1914* (2nd edn), Dimashq, Dār Ṭalās, 1991, p. 454.

(33) *Ibid.,* pp. 454-455; Khadduri, Majid, "'Azīz 'Alī al-

Miṣrī and the Arab Nationalist Movement", in A. Hourani (ed.), *St Antony's Papers*, 17, *Middle Eastern Affairs*, 4, London, Oxford University Press, 1965, p. 149. 前二著はミスリーの談話にもとづく。さらに以下を参照せよ。Public Record Office, Foreign Office（以下 PRO. FO. と略す）882/15. [al-Fārūqī, Muḥammad Sharīf], "Statement of Captain 'X.'", (12. 9. 1915).

(34) Sa'īd, *al-Thawra...*, Vol. 1, pp. 46–47.

(35) 例えば、以下のものでは前述のトルコ人の役割を評価した部分が欠落している。al-Baṣīr, *op. cit.*, p. 25; 'Azīz Bek, *Sūriya wa Lubnān fi al-Ḥarb al-'Ālamīya: al-Istikhbārāt wa al-Jāsūsīya fi al-Dawla al-'Uthmānīya*, Bayrūt, 1933, p. 29. アジーズ・ベクは、オスマン政府の保安情報局長（mudīr al-amn al-'ilm）を務めた人物。

(36) 二重帝国構想を《カフターン協会》と結びつける通説は史料的に疑問の点が多い。英国外交資料によれば、同結社は「アラブがオスマン帝国においてトルコとの同権を享受すること」を謳うが具体性には乏しく、同構想は《盟約協会》のものとしている。一方、シハービーは《協会》＝二重帝国構想すら否定している。PRO.FO. 882/24, "Note by the Arab Bureau, Cairo, on the A.H.D. Committee or Committee of the Covenant", (4.1919); al-Shihābī, Muṣṭafā, *Muḥādarāt 'an al-Qawmīya al-'Arabīya: Ta'rīkhuhā wa Qawāmuhā wa Marāmīhā*, al-Qāhira, Ma'had al-Dirāsāt al-'Arabīya al-'Āliya, 1958, pp. 78–79. 詳細については、Harran, Tag el-Sir Ahmet, "The Young Turks and the Arabs: The Role of Arab Societies in the Turkish-Arab Relations in the Period 1908–1914", in Hacettepe Üniversitesi Türkiye ve Orta Doğu Araştırma Enstitütü (ed.), *Türk-Arap İlişkileri: Geçmişte, Bugün ve Gelecekte*, Ankara, 1980, pp. 197–198.

(37) ミスリーは自分がイスタンブルを去ったことによって結社の多民族性が失われたとも述べている。Khaddurī, "'Azīz 'Alī...", pp. 149–150; Birrū, *op. cit.*, p. 454.

(38) *Ibid.*

(39) Qadrī, Aḥmad, *Mudhakkirātī 'an al-Thawra al-'Arabīya al-Kubrā*, Dimashq, Maṭābi' Ibn Zaydūn, 1956, p. 14.

(40) むろんアメリカ国家が現実に「普遍的なもの」を有していたかどうかは別問題である。この点に関し、合州国とオスマン帝国を簡潔に比較したものとして、鈴木董「多民族国家の光と影　アメリカ合衆国とオスマン帝国と」『アメリカ史研究』第一七号（一九九四年）、二一—二五頁。

(41) Birrū, *op. cit.*, p. 454. ミスリーの談話によるこの条項は他の資料では見当たらない。

(42) ラッセル大尉はこう書いている。「その運動は全く宗教から独立しており、それゆえパン＝イスラミズムやアラブ人カリフ運動とは別物である。運動は、こうした理由により（カイロの）シャイフ・ラシード・リダーのような有力な原理主義者（fanatics）の支援を未だ得ていない。…彼［ミスリー］はシリアのキリスト教徒やドルーズ派の大多数が彼の側に立つと信じている」。PRO. FO.

"Precis of Conversation with Abd el Aziz el Masri, on 16th Aug. 1914", (Cairo, 17. 8. 1914), enclosed with PRO. FO. 371/2140/46261. Cheetham to Grey, no. 143 (Cairo, 24. 8. 1914). のちに Burdett, Anita L.P. (ed.), *Arab Dissident Movement 1905-1955,* [London], Archive Editions, 1996, Vol. 1, pp. 243-245 に収録。

(43) ミスリーのプロフィールに関してはバッドウーリーの前掲論文のほかに以下のものがある。"'Azīz al-Miṣrī Yataḥaddathu ilā al-Ahrām", *al-Ahrām* (21. 7. 1958); Ṣubayḥ, Muḥammad, *Baṭal Lā Nansāhu: 'Azīz al-Miṣrī wa 'Aṣruhu,* Ṣaydā' and Bayrūt, al-Maktaba al-'Aṣrīya, [1971]; Burj, 'Abd al-Raḥmān, *'Azīz al-Miṣrī wa al-Ḥaraka al-'Arabīya, 1908-1916,* al-Qāhira, Markaz al-Dirāsāt al-Siyāsīya wa al-Istrātījīya bil-Ahrām, 1979; Abū al-Majd, Sabrī, *'Azīz 'Alī al-Miṣrī wa Ṣaḥbih: Banāt al-Waḥda al-'Arabīya wa al-Islāmīya, 1900-1916,* al-Qāhira, al-Hay'a al-Miṣrīya al-'Āmma lil-Kitāb, 1990.

(44) Djemal Pasha, *Memories of a Turkish Statesman,* New York, G.H. Doran, 1922, pp. 60-61.

(45) Birrū, *op. cit.,* pp. 207-210.

(46) Goldschmidt, Arthur, Jr. (trans.), *The Memoirs and Diaries of Muhammad Farid, an Egyptian Nationalist Leader, 1868-1919,* San Francisco, Mellen University Research Press, 1992, p. 89. エジプト人のオスマン帝国観については次を見よ。Jankowski, James, "Ottomanism and Arabism in Egypt 1860-1914", *Muslim World,* Vol. 70, No. 3・4 (1980), pp. 226-259.

(47) 彼は当初、エジプト紙 *al-Ahrām* のインタヴューに答えて人員・物資の不足をその理由に挙げ、さらにサヌーシー教団との戦術上の「確執」を仄めかしていた。だが、この「確執」には、ミスリーによる公費流用疑惑も含まれていたらしい。後述するように、彼は軍法会議にかけられてサヌーシー問題も審理の対象となる。しかし、裁判の思わぬ政治化は、逆に彼を窮地から救う。いずれにせよ、晩年になると彼は上記の疑惑に関してはエンヴェルの陰謀とし、リビアからの「離脱」については口を閉ざすようになった。アラブ・ナショナリズムの全盛期において、かつてのオスマン＝アラブ主義者として「語りえない」出来事の一つといえようか。Stoddard, Philip Hendrick, "The Ottoman Government and the Arabs, 1911-1918: A Preliminary Study of the Teşkilat-ı Mahsusa", Ph. D. diss., Princeton University, 1963, pp. 92-93, 209.

(48) イスタンブルに来るまで彼はシャーヒリエ Shāhilié というチェルケス系のファミリー・ネームを名乗っていた。また後年には、英国のイラク高等弁務官H・ドブズによってトルコ人呼ばわりされてもいる。Khadduri, "'Azīz 'Alī...", p. 145, 157.

(49) PRO. FO. 141/462/1198, "Extract from Diary by R.S." (Jidda, 18. 10. 1916); Storrs, Ronald, *Orientations,* London, I. Nicholson & Watson, 1937, p. 194.

(50) Darwaza, *op. cit.,* Vol.1, p. 33. その数は、「幹部」五四

人中六五％に及ぶ。Tauber, *Emergence...*, p. 290. イラク生まれの軍人一〇人のうち七人までが加わったという証言もある。Lawrence, T. E., *Seven Pillars of Wisdom: A Triumph* (rep. edn), London, Cape, 1988, p. 23. T・E・ロレンス、柏倉俊三訳『知恵の七柱』平凡社、一九六九年、第一巻、三四頁。

(51) イラク出身軍人に関しては以下を参照。Batatu, Hanna, *The Old Social Classes and the Revolutionary Movements of Iraq: A Study of Iraq's Old Landed and Commercial Classes and of its Communists, Ba'thists and Free Officers,* Princeton, Princeton University Press, 1978, pp. 195-205, 319-361. ハーシミー、サイードそれぞれのプロフィールについては次のものが詳しい。al-Qaysī, Sāmī 'Abd al-Ḥāfiz, *Yāsīn al-Hāshimī wa dawaruhu fi al-Siyāsa al-'Irāqīya Bayna 'āmai, 1922-1936,* Vol. 1, al-Baṣra, Maṭba'a Ḥadād, 1975; Birdwood, Lord, *Nuri as-Said: A Study in Arab Leadership,* London, Cassell, 1959; Khadduri, Majid, *Arab Contemporaries: The Role of Personalities in Politics,* Baltimore and London, The Johns Hopkins University Press, 1973, pp. 19-42.

(52) Simon, Reeva S., "The Education of an Iraq Ottoman Army Officer", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.,* p. 153.

(53) al-Baṣīr, *op. cit.,* p. 25.

(54) 象徴的な事例として、サイードも教官を勤めたこともあるバグダードの幼年学校スタッフの「トルコ化」――外国人教官からの自立という一面も有していたのだが――を挙げることができる(Simon, *loc. cit.,* p. 157)。

(55) Burdett, *op. cit.,* vol. 1, p. 151; Tauber, *Emergence...,* p. 213.

(56) *Ibid.,* p. 223; Bray, N.N.E., *Shifting Sands* (rep. edn), New York, AMS Press, 1974, pp. 45-46.

(57) al-Hāshimī, Ṭaha, *Mudhakkirāt Ṭaha al-Hāshimī, 1919-1943,* Bayrūt, Dār al-Ṭalī'a, 1967, p. 6. タハは《協会》書記。ヤーシーンの弟。イエメンの任地へ向かう途上の「巡礼」だった。

(58) al-Sa'īd, Nūrī, *Mudhakkirāt Nūrī al-Sa'īd 'an al-Ḥarakāt al-'Askarīya lil-Jaysh al-'Arabī fi al-Ḥijāz wa Sūrīya, 1916-1918* (2nd edn), Bayrūt, al-Dār al-'Arabīya lil-Mausū'āt, 1987, p. 20.

(59) Riḍā, *loc. cit.,* p. 179.

(60) 青年トルコ時代における議会の動向に関しては、Prätor, Sabine, *Der arabische Faktor in der jungtürkischen Politik. Eine Studie zum osmanischen Parlament der II. Konstitution, 1908-1918,* Berlin, K. Schwarz, 1993.

(61) なお、現実政治における「柔軟性」と政治理念の「一貫性」の緊張関係は改めて検討を要すべき課題だろう。この点に関しては、ザフラーウィーの盟友であったリダーも例外ではない。Haddad, Mahmoud, "Arab Religious Nationalism in the Colonial Era: Rereading Rashīd Riḍā's Ideas on the Caliphate", *Journal of the American Oriental Society,* Vol.117, No.2 (1997), pp. 253-277.

(62) タハ・アル＝ハーシミーは率直にもこう述べている。

「なぜそれ［結社の「綱領」］を公表しないのか？たとえそうしてもトルコ人は喜ぶだろう。この結社が国家の護持のための組織であることを保証しているではないか」。Aḥmad Shafīq, *op. cit.*, vol.3, p. 82.

(63) ʻAzīz Bek, *op. cit.*, pp. 22-29.

(64) Djemal Pasha, *op. cit.*, p. 61.

(65) Birrū, *op. cit.*, pp. 455; Dāghir, *op. cit.*, p. 36.

(66) [Jamāl Bāshā], *Īḍāḥāt ʻan al-Masāʼil al-Siyāsīya allatī Jarat Tadqīquhā bi-Dīwān al-Ḥarb al-ʻUrfī al-Mutashakkil bi-ʻAlayh,* Istanbul, Maṭbaʻa al-Ṭanīn, 1916, p. 21. 以下、*Īḍāḥāt* と略す。

(67) Ṣubayḥ, *op. cit.*, pp. 31, 48-49.

(68) Djemal Pasha, *op. cit.*, pp. 62-63.

(69) 同時にこの改革は軍の「イスラーム化」の側面をも有していたという。Kayalı, *op. cit.*, p. 179.

(70) Dāghir, *op. cit.*, p. 50; Birrū, *op. cit.*, p. 468.

(71) ジヤ・エフェンディーDiya Afandiの証言。*Thawrat al-ʻArab,* p. 105.

(72) ジェマルは事態の推移に危機感を覚えて穏便な解決を忠告したが、こうした態度に改めて問題の政治性が見て取れる。Djemal Pasha, *op. cit.*, p. 64.

(73) 裁判をめぐるアラブ、イギリスの反応に関しては、Dāghir, *op. cit.*, p. 51; *Thawrat al-ʻArab,* p. 104; Gooch, G. P. and Harold Temperley (eds.), *British Documents on the Origins of the War 1898-1914: The Last Year of Peace,* London, H. M. Stationery Office, 1938, Vol.10, p.826; Burdett, *op. cit.*, vol. 1, pp. 233-240.

(74) エジプト亡命中のムスリーもまた死刑を宣告された。Bidwell, Robin (introd.), *The Arab Bulletin: Bulletin of the Arab Bureau in Cairo, 1918-1919,* Gerrards Cross, Archive Editions, 1986, Vol.1, pp. 128, 144-145; *ibid,* Vol.2, p. 36.

(75) al-Jundī, Adham, *Shuhadāʼ al-Ḥarb al-ʻĀlamīya al-Kubrā,* Dimashq, Maṭbaʻa al-ʻUrūba, 1960, pp. 97-99.

(76) ジャザーイリーは、当時陸軍少佐としてアンタキア第一三六連隊長の職にあり、かつ《盟約協会》アレッポ支部長であった。

(77) *Īḍāḥāt,* p. 121.

(78) Archives du Ministère des Affaires Etrangères (以下、MAE と略) Turquie, N. S. 121. Couget à Pichon, n°92 (Beyrouth, 2. 5. 1913).

(79) Archives Nationales (以下、AN と略) 423AP8. Ibrahim S. Naggiar, "Les Colonies Syriennes à l'étranger" (Paris, 23. 10. 1916). その日はエンヴェルによるクーデタのわずか四日後である。

(80) 会合はチャタルジャ、ガリポリに配置された部隊所属四〇名の将校を中心としていた。MAE. Turquie, N. S. 120. Defrance à Jonnart, n°105 (Le Caire, 13. 5. 1913).

(81) MAE. Turquie, N. S. 186. Defrance à Doumergue, n°142 (Le Caire, 26. 5. 1914). 同史料にはムスリーも関わっていたかのような記述が見られるが、当時リビアにいた彼に積極的な関与は不可能であろう。

(82) MAE. Turquie, N. S. 120. 前掲註80参照。

(83) 「シリアのムハンマド・アブドゥフ」と呼ばれ、シリア州図書館担当監察官 (mufattish dūr al-kutub al-'āmma) としてザーヒリーヤ図書館などの設立に関与し、アラビア語写本を収集した啓蒙家タ一ヒルは、のちに甥が刑死するまで基本的にはオスマン帝国の支持者であった。タ一ヒルに関しては、以下を参照。al-Bānī, Muḥammad Sa'īd, *Tanwīr al-Baṣā'ir bi-Sīrat al-Shaykh Ṭāhir,* Dimashq, Maṭba'a al-Ḥukūma al-'Arabīya al-Sūrīya, 1920; al-Khaṭīb, 'Adnān, *al-Shaykh Ṭāhir al-Jazā'irī: Rā'id al-Nahḍa al-'Ilmīya fī Bilād al-Shām wa A'lam min Khirrījī Madrasatihi,* al-Qāhira, Ma'had al-Buḥūth wa al-Dirāsāt al-'Arabīya, 1971; Escovitz, Joseph H., "He was the Muḥammad 'Abduh of Syria: A Study of Ṭāhir al-Jazā'irī and His Influence", *International Journal of Middle East Studies,* Vol.18, No.3 (1986), pp. 293-310. 彼のサークルについては次を見よ。Commins, David Dean, *Islamic Reform: Politics and Social Change in Late Ottoman Syria,* Oxford and New York, Oxford University Press, 1990, pp. 89-98.

(84) 彼自身九カ国語に通じ数学に抜群の才能を示したという。また軍事教育だけでなく、イスタンブルの工学校 (madrasa al-handasa al-barrīya) にも学んだ。その教養の一端は、一九〇七年に執筆し死後出版された論文 (*Kitāb Mīzān al-Ḥaqq fi al-Manṭiq*) にも示されている。al-Jundī, *op. cit.,* p. 133.

(85) MAE. Turquie, N. S. 186. 前掲註81参照。この点、他ならぬ叔父のタ一ヒルもエジプトに滞在していたことは示唆的である。

(86) しかし、シリアの名家の出である党首のアズムは一門からの擁立を画策しており意見の一致を見ていたわけではない。*Īḍāḥāt,* p. 56; Djemal Pasha, *op. cit.,* p. 232.

(87) MAE. Turquie, N. S. 120. Bompard au Ministére des Affaires Etrangéres, n°328 (Péra, 19. 4. 1913) et Couget à Bompare (Beyrouth, 31. 5. 1913); AN423AP8. 前掲註79参照。

(88) *Ibid.* フランスの拒否の要因ともなったのか、ジャザーイリーとアルジェリア抵抗運動の指導者アブド・アル＝カーディルとの「関係」が強調されている。MAE. Turquie, N.S.186. 前掲註81参照。

(89) Khalidi, *op. cit.,* pp. 343-344; *idem,* "Social Factors in the Rise of the Arab Movement in Syria", in S.A. Arjomand (ed.), *From Nationalism to Revolutionary Islam,* London, Macmillan, 1984, pp. 56-57.

(90) MAE. Turquie, N. S. 120. 前掲註80参照。

(91) ジャザーイリーの友人宛書簡（一九一四年一月一五日付）。*Thawrat al-'Arab,* pp. 127-128.

(92) al-Shihābī, Muṣṭafā, *Muḥāḍarāt fi al-Isti'mār,* al-Qāhira, Ma'had al-Dirāsāt al-'Arabīya al-'Aliya, 1957, Vol. 2, p. 35; Rashīd Riḍā, "Riḥlat Ṣāḥib al-Manār (fī al-Sūrīya)", *al-Manār,* Vol. 11, No. 11 (1909), p. 947.

(93) Birrū, *op. cit.,* p. 269.

(94) PRO. FO. 371/2490/128225. General I. Hamilton to War Office (25. 8. 1915).

(95) al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 33-36.

(96) オスマン軍におけるアラブ師団は一〇個（ただしこの他六個師団にも若干のアラブ人がいた）からなり、合計すると一万人規模の将校がいた。そのうちイラク出身者は、第三五・三七・三八師団の合計三個（第三六師団はクルド人との混成）を占め、ハーシミーの第一二軍団は第三五・三六・三七師団による編成であった。つまり、イラク出身者の三分の二以上を彼が掌握していたことになる。PRO. FO. 882/15. 前掲註33参照。*Idem* 371/2486. Lt.-Col. Parker, "Note on Arab Movement" (21. 11. 1915).

(97) al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 38-40.

(98) *Ibid.*, vol.1, pp. 43-44; Qadrī, *op. cit.*, pp. 39-40. このとき両結社の仲介を務めたのがウライシーであった。

(99) 「議定書」のテクストについては、Antonius, *op. cit.*, pp. 157-158. 邦訳、一六七頁。

(100) *Thawrat al-'Arab*, p.193; al-Qaysī, *op. cit.*, Vol. 1, p. 44.

(101) Qadrī, *op. cit.*, p. 64.

(102) Sa'īd, Amīn, *Asrār al-Thawra al-'Arabīya al-Kubrā wa Ma'sāt al-Sharīf Ḥusayn*, Bayrūt, Dār al-Kātib al-'Arabī, [1935], pp. 258-259.

(103) al-Shihābī, *Muḥādarāt 'an al-Qawmīya...*, pp. 112-113. フサインは、イブン・サウード、イブン・ラシードに次ぐ第三候補に過ぎなかった。

(104) Simon, Reeva S., *Iraq between the Two World War: The Creation and Implementation of a Nationalist Ideology*, New York, Columbia University Press, 1986, pp. 46-47.

(105) al-Qaysī, *op. cit.*, Vol.1, pp. 49-54. ロシア軍との戦闘で武勲を立てた彼は、ドイツ皇帝ヴィルヘルム二世の特別の推挙で准将に昇進している。

(106) Qadrī, *op. cit.*, p. 46.

(107) Khadduri, *Arab Contemporaries...*, p. 21. 邦語のものとして参照、林武「アラブ民族主義研究ノートーヌリ・サイド論の試み」『現代アラブの政治と社会』アジア経済研究所、一九七四年、二〇二—二二一頁。

(108) as-Sa'id, Nuri, *Arab Independence and Unity*, Baghdad, The Government Press, 1943, p. 2.

(109) al-Sa'īd, *Mudhakkirāt...*, p. 20.

(110) Batatu, *op. cit.*, p. 180.

(111) as-Sa'id, *Arab Independence...*, p. 2.

(112) [al-Sa'īd, Nūrī], *Aḥādīth*, Baghdād, Maṭba'a al-Ḥukūma, 1947, pp. 90-92.

(113) Tauber, *The Arab Movements...*, p.113.

(114) この「逆アラブの反乱」については、Anderson, Lisa, "The Development of Nationalist Sentiment in Libya", in Khalidi, et al. (eds.), *op. cit.*, p.234.

(115) Antonius, *op. cit.*, p.212. 邦訳、一二二頁。

(116) The British Library, Oriental and India Office Collections. L/P&S/11/88. Cox to the Secretary to the Government of India, in the Foreign and Political Department, no. 82-B (Basra, 3. 12. 1914).

(117) al-Sa'īd, *Mudhakkirāt...*, pp. 23-24.

(118) PRO.FO.882/15.[Arab Bureau] to Lawrence ([Cairo], 26. 3. 1916).

(119) ミスリーに対する批判的な見解としては、①ハッドウーリーやタウバーの研究に典型的に見られるように、アラブ・ナショナリストとしての不徹底ぶり、②ミスリーと特に英仏両国との関係が、反帝国主義者あるいはオスマン主義者としての像を色褪せたものとしている、といった二点に集約されるといえるだろう。後者の批判については以下のものがある。Gershoni, Israel and James P. Jankowski, *Egypt, Islam, and Arabs: The Search for Egyptian Nationhood, 1900-1930,* Oxford, Oxford University Press, 1986, p.31

(120) PRO.PRO.30/57/48. 'Aziz 'Ali [al-Misri], "Sa Seigneurie Earl Kitchener", (Cairo, 5. 2. 1916).

(121) 別の史料では、北限をアレクサンドレッタ、モースル、ペルシア国境のラインとしている。いずれにせよ、彼の「故郷」エジプトが外されていることに注意されたい。PRO. FO. 371/2140/46261. 前掲註42参照。

(122) PRO. FO. 371/2140/87395. P. P. Graves, "Note on Conversation with Aziz Ali Bey el-Masri" (6. 12. 1914), enclosed with Cheetham to Grey, no. 203 (Cairo, 13. 12. 1914); Burdett, *op. cit.*, Vol. 1, pp. 284-286.

(123) PRO. FO. 371/2140/77088. Clayton to Cheetham (30. 10. 1914), enclosed with Cheetham to Grey, no. 177 (Cairo, 15. 11. 1914); Burdett, *op. cit.*, Vol.1, pp. 275-280.

(124) MAE. Guerre. 869. Colonel Maucorps, "Sur un entretien avec le Commandant Aziz Bey", n°52 (Le Caire, 7. 6. 1915).

(125) Antonius, *op. cit.*, p. 155. 邦訳、一六五頁。

(126) Dāghir, *op. cit.*, p. 90.

(127) PRO. FO. 371/3415/186566. War Office to the Under Secretary of State, no. 756/13, MI2 (10. 11. 1918). 彼はのちにモロッコの反仏闘争に身を投じようとすることで、その実行を試みた。PRO. FO. 371/4236/126722. Taylor to Crackanthorpe, no.M8110 (Madrid, 10. 5. 1919), enclosed with Crackanthorpe to Curzon, no. 338 (San Sebastian, 29. 8. 1919).

(128) L/P&S/10/464. Foreign Office to Cheetham, no. 87 (11. 8. 1914).

(129) PRO. FO. 371/3396/37213. Hardinge to Balfore, no. 92 (Madrid, 20. 2. 1918).

(130) アドリアノープルを含むヨーロッパ領、ヒュダヴェンディギャール、アイドゥン、コンヤ、アンカラ、カスタモスの各州。

(131) エルズルム、ヴァン、ムシュ、ビトリス、ディヤルバクル（マムレテュルアジズを含む）。

(132) キリキア、シリア、レバノン、パレスティナ、メソポタミア。

(133) アシール、イエメンについては、在地支配者であるイドリーシーとイマーム・ヤフヤーにそれぞれ委ねられる。

この構想では、すでにオスマン帝国の手を離れていたシャマール、クウェート、リヤドは除外されている。

(134) 結社メンバーのファールーキーは、こう述べている。「トルコ軍におけるアラブ人将校の九〇%とクルド人将校の一部がわれわれの結社のメンバーである」。PRO. FO. 882/15. 前掲註33参照。

(135) PRO. FO. 371/3396/14436. Hardinge to Balfore, no. 25 (Madrid, 14. 1. 1918). ″スリーは、フサインのアラビア半島の諸勢力との軋轢を指摘し、彼の没落を予言している。もちろん、フサイン自身は、ヒジャーズを中心とした戦後の新秩序を構想していた。この点に関しては以下を参照。Teitelbaum, Joshua, "Sharif Husayn ibn Ali and the Hashimite Vision of the Post-Ottoman Order: From Chieftaincy to Suzerainty", *Middle Easten Studies,* Vol. 34, No. 1 (1998), pp. 103-122.

(136) Ghuṣayn, Fā'iz, *Mudhakkirātī 'an al-Thawra al-'Arabīya,* Dimashq, Maṭba'a al-Taraqqī, 1956, pp. 238-239; Khadduri, "'Azīz 'Alī...", pp. 152-156. アリー・ジャウダト・アル=アイユービー（一八八六―一九二六九年）は、この時″スリーに従った軍人のひとりである。彼もまた″スリーとともに「アラブ」軍を離れたがその後復帰した。'Alī Jawdat, *Dhikrayāt 'Alī Jawdat 1900-1958,* Bayrūt, Maṭābi' al-Wafā', 1967, pp. 41-45.

(137) 陸軍大臣宛書簡（一九一四年一月二〇日付）、*Thawrat al-'Arab,* p. 108.

(138) PRO. FO. 371/1968/37584. Cheetham to Grey, no. 76 (Cairo, 9. 8. 1914).

(139) MAE. Guerre. 869. 前掲註124参照。

(140) Antonius, *op. cit.,* p. 238. 邦訳、二二六〇頁。

(141) Khoury, *op. cit.,* pp. 78ff.「シリア王国」については以下の文献をも見よ。Russell, Malcolm B., *The First Modern Arab State: Syria under Faysal, 1918-1920,* Minneapolis, Bibliotheca Islamica, 1985; Gelvin, James L., *Divided Loyalties: Nationalism and Mass Politics in Syria at the Close of Empire,* Berkeley and Los Angeles, University of California Press, 1998.

(142) Ajami, Fouad, "The End of Pan-Arabism", in T. E. Farah (ed.), *Pan-Arabism and Arab Nationalism: The Continuing Debate,* Boulder, Westview Press, 1987, p. 106; al-Azmeh, Aziz, "Nationalism and the Arabs," in D. Hopwood (ed.), *Arab Nation, Arab Nationalism,* Basingstoke and London, Macmillan, 2000, p. 74.

(143) W・クリーヴランドはこの点に関し、オスマン政府の官僚からアラブ・ナショナリズムのイデオローグに転じたサーティウ・アル=フスリーの立場をハーシ″ーのそれと同定するが、これには疑問が残る。たとえ両者が一見同じ行動をとったからといって、ハーシ″ーを単純な「体制派」オスマン主義者と見なすことができないように、フスリーをオスマン=アラブ主義者と考えることもできない。オスマン=アラブ主義の設定はこうした粗雑な分類化を避けるためでもある。Cleveland, William L., *The Making of an Arab Nationalist: Ottomanism and Arabism in*

the Life and Thought of Sati' al-Husri, Princeton, Princeton University Press, 1971, p. 41.

(144) これを彼ら自身の言葉で置き換えるならば、「ステイト」＝watan, dawla,umma、「ネイション」＝qawm, jins となるだろう。「ステイト」と「ネイション」の区別に関しては、以下の文献所収のK・A・アッピアの論考を参照。マーサ・C・ヌスバウム他、辰巳・能川訳『国を愛するということ――愛国主義（パトリオティズム）の限界をめぐる論争』人文書院、二〇〇〇年。

(145) 板垣雄三『歴史の現在と地域学――現代中東への視角』岩波書店、一九九二年、二六―二八頁。

(146) 例えば、ウライシーがリビア戦争やバルカン戦争の際に『ムヒード』紙で展開した愛国的な論説は、彼がアラブ会議で問うたアラブ性と主観的に何ら矛盾していない。Khalidi, "'Abd al-Ghani...", pp.57-58.

(147) 以上の理論的立場に関しては、スラヴォイ・ジジェク、鈴木一策訳『為すところを知らざればなり』みすず書房、一九九六年、特に第五章。

(148) こうした「国民国家」を含む「アラブ諸国家システム」については、長沢栄治「アラブ主義の現在」木村・長沢編『地域の世界史一二 地域への展望』山川出版社、二〇〇〇年を参照。ただし、上記論文で言及される「アラブ主義」は、本稿におけるそれに較べ、より広い文脈にもとづくものである。

[付記]本文脱稿後、酒井啓子編『民族主義とイスラーム――宗教とナショナリズムの相克と調和』（アジア経済研究所、二〇〇一年）を手にとる機会を得た。特に同書の第二章「中東・アラブ世界における民族主義と宗教」は、初期アラブ・ナショナリズムの的確な研究史整理としても参照されるべき論考だろう。それを踏まえた上で、本稿の位置取りを改めて示すとすれば、初期アラブ・ナショナリズムにおける「国民主義」的要素を生み出した歴史的条件のみを考慮するのではなく、もう一つの、ありえたかもしれないオルナタティヴな側面を探る試みであるということになろうか。